

万象 平成十四年十一月十三日第三種郵便物認可
令和八年一月一日発行（毎月一回一日発行）
第二十四卷 第十号（通巻二八六号）

万象

B A N S Y O

一月号

2026. 1



謹賀新年

氣宇壮大に志を高く

令和八年丙午

万象俳句会

令和八年

一月号

万象

BANSYO

植物から色が抽出され、媒染されるのも、人間が
さまざまな事象に出会い、苦しみを受け、自身の
色に染めあげられていくのも、根源は一つであり、
光の旅ではないだろうか。

志村ふくみ『色を奏でる』より

万 象

令和8年1月号

主宰色紙 人訪はな三日の空のうす濁り 江見悦子 4

主宰作品 初時雨 江見悦子 5

万象の窓^{④⑥} 晩秋の二日間 江見悦子 6

名誉顧問作品 草の花 小林愛子 7

風音集

中村 千久・福島せいぎ・柳澤 宗正・中條 睦子
松原智津子・亀田やす子・沢辺たけし・吉中 愛子
榎本 文代・神田美穂子・井村 和子・前田貴美子

風音散歩^{③⑧} (一月号) 小林 愛子 11

同人作品

江見悦子選 12

同人作品の佳句 江見悦子選 33

同人会だより 創刊25周年を有意義な年に 中條 睦子 34

11月の「万象」オンライン同人句会高点句

珈琲ぶれいく^{⑥⑧} 35

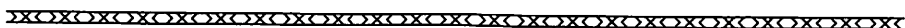
佳句佳句しかじか 同人作品鑑賞(十一月号) 沢辺たけし 36

新春特別作品 追 伸 穂苅 照子 38

光 陰 高橋 ひろ 40

菊 膾 小池 清晴 41

同人特別作品



特別作品評（十一月号）

荻野加壽子

42

私のこの一句

阿久津勝利・沢辺たけし・藤田 裕子・奥

太雅

43

令和7年度「万象」同人会総会・全国俳句大会 報告

小池 清晴

44

「この本のこの一句『くれのおも』」（月刊「俳句界」より転載）

48

俳句カレンダー掲載句自註

人日の電車に並ぶスニーカー（二月）

江見 悦子

49

続・風のしをり^{②⑤} 子規の写生論の展開（二）

高木良多

編集部

50

万葉の抒情^{②⑨} 『万葉集』にたずねる抒情の源流^{②⑨}

橋本 清

51

万象ノオト「車」

杉本 年虹・佐々木 茂・川口 和代
渡部 洋子・高井 明子・植村 康子

52

巻頭作家（十二月号）プロフィール 鈴木隆久（佐倉）

三屋 英俊

54

万象作品

江見悦子 選

55

北から南から 旧新潟税関庁舎への吟行（新潟）

高野 松風

65

万象作品の佳句

江見 悦子

66

ルビーの小函（二月号）

編集部・校正担当

69

東西南北

70

人形はな



三日の空の

うす濁り

悦子



元旦、二日と事の多い時間が過ぎ、二人暮しの我が家にも、日常の時間が戻って来た。

うすうすと濁った三日の空を見上げていると、ふと人恋しさが募り、亡き父母を、又懐かしい友人の許を訪ねたくなった。

都会のマンションのベランダから眺める空であっても、刻々と変化する空の有り様には詩心が刺激される。

初時雨

江見悦子

(主宰)

「なると」五十周年を祝して

寒蘭の香に迎へたり五十年
道をそれ木犀の香を深々と
枝豆のゆで汁丹波の土の色
栗剥くや思ひ出したるパスワード
師の墓に枯れ高々と女郎花
朝刊に居眠る夫や冬来る
ハワイコナ挽く間に過ぐる初時雨



晩秋の二日間

江 見 悦 子

令和7年10月27日、東京の長い秋雨が明けたこの日、「ホテルグランドヒル市ヶ谷」で「『万象』同人会総会」と「『万象』全国俳句大会」が開かれました。同ホテルでは3回目の開催、令和5年から同人会総会と全国俳句大会を同日に行っています。JR市ヶ谷駅から市ヶ谷橋を渡ってすぐのところにあるホテルからは外濠が望まれ、春には満開となる桜の薄紅葉が始まっていました。

この日は、全国の同人、会員の皆様にお会いして直接言葉を交わせる嬉しい日です。

北海道から沖縄まで83名が集い、同人会総会、全国俳句大会とスムーズに進行しました。役員の方々、実行委員の皆様の苦勞に深く感謝申し上げます。

詳しくは1月号の記事になるので細かくは書きませんが、中山純子記念俳句賞、万象俳句賞、新人賞受賞の皆様の挨拶、また新同人代表の挨拶を聞き、夫々の方々が自分の言葉で率直に話されていたことに感銘を受け、若いエネルギーを感じました。

翌28日、札幌の松原智津子さんのご希望で、沢木欣一先生、細見綾子先生のお墓参りに出掛けました。11月5日の欣一忌を目前にした日取りとなりました。

菩提寺は府中市の誓願寺、JR中央線の武蔵境駅で西武多摩川線に乗り換え、二つ目の多磨駅が最寄駅です。智津子さんと同じ年で、俳友として長いお付き合いのある柏の山本とく江さんも一緒に。電車で向かうのは始めてであるものの、何度も伺っているお寺なので甘く考えて道に迷ってしまい、何回か人に尋ねてようやく山門に着きました。

楓の薄紅葉に覆われた参道を進んで訪れた墓地は、明るい秋日の中にひっそりと鎮まっています。墓石を洗い桔梗の花を供え、線香の香に頭を垂れてそれぞれが報告を済ませ、満ち足りた思いで誓願寺をあとにしました。

秋日和記憶久しき師の墓へ 智津子

行く秋や余白を語る師の墓前 とく江

師の墓に枯れ高々と女郎花 悦子

草の花

小林 愛子

(名譽顧問)

地を這うて紅あはれ草の花
露けしや湯気の蕎麦切り盆に乗せ
小鳥来る置き去られある屋敷神
錆び付きしトランクルーム草は穂に
野にクレーン残して釣瓶落しかな
師の墓を訪ぬる人に賜日和
青空や柚子の黄金の枝垂れける

文化の日

中村 千久

(編集人)

枯蓮の濠夕照を散らしをり

鴻臚館

幻影の館の礎石草もみぢ

とろとろと蜂蜜溶くる霜夜かな

兼題「箸」

煮凝のかからぬチョップステイクス

AIのニュース訛るや文化の日

指先に目を数へつつ毛糸編む

鰯 雲

福島せいぎ

(顧問)

鰯雲座れば硬き旅の椅子

枕にもならぬ冬瓜ころがせり

銀杏を拾ひてあとは考へず

色鳥の鐘楼門に鳴き交はす

短日や石工が刻む水子仏

青竹の添水の音にリズムあり

冬

耕

柳澤 宗正

(顧問)

晴れ渡る丘に車座草紅葉

秋さぶやわが影長く傾ぎたる

猫譲渡会首尾よく終へて冬に入る

小春空足投げ出して爪を切る

ガス灯の点る馬車道小夜時雨

冬耕や演歌流るる山の畑

良

夜

中條 睦子

(同人会会長)

明け空を波打つて来る鶉の群れ

炉火映ゆる帯戸三面秋深む

秋澄めり海豚呼ぶ声遠くまで

門をかけたる闇や虫浄土

つくばひに水なみなみと月を待つ

瞑想の庭の水照りや笹子鳴く

繭の実

松原智津子

(北海道)

秋日和記憶久しき師の墓へ
師の墓辺繭の実たわわ日を弾き
花残る萩刈る少し詫び心
貸ボート皆裏返し秋暮るる
お日様の光薄薄冬に入る

今朝の冬

亀田やす子

(栃木)

豆柿や寺の庫裡よりピアノの音
空真つ青楷の木の実の敷くほどに
小春日や弓引く音のきりきりと
つくばひに和毛の浮かぶ今朝の冬
袴着のさつと跳びたる水たまり

十日の菊

沢辺たけし

(千葉)

畑の隅十日の菊の咲き乱れ
一叢のすすき風呼ぶ孤塁跡
山道の舗装の尽きて紅葉冷え
薄雲の流るる蒼き十三夜
旅立ちの神を見送る鹿の声

みみず鳴く

吉中愛子

(東京)

喪の開くる卓上火鉢に松茸を
長き夜の茶箱の底に子の日記
転倒の夫の強がり黄落期
墓じまひ跡の赭土みみず鳴く
立冬の光染み入る石の椅子

冬に入る

榎本文代

(神奈川)

騎馬戦の勝鬨高し秋の空
揺れながら蓑虫蓑を繕へり
ボール蹴る少年ひとり秋夕焼
蒸籠の湯気のゆたかや冬に入る
ヴィオロンに垣の茶の花こぼれつく

秋 深 し

神田美穂子

(静岡)

天平の礎石に座して秋惜しむ
コスモスの風に胸の子よく眠る
掬ひ上げ布目の粗き新豆腐
ポストまで徒歩三分や月の道
秋深し昨夜の日記に少し嘘

菊 の 酒

井村和子

(石川)

麦こがし溶く白山のご霊水
彼の岸の夫へ菊酒ご命日
徒言^{あたごと}を胸にたためり冬隣
秋夕べ間延びして鳴く鳩時計
言ひ忘れ聞き忘れしも梢明り

草 は 実 に

前田貴美子

(沖縄)

窯守へ三日月残る朝かな
陶房の軒釈迦頭と猫の皿
真昼間が熟柿をひとつ落したり
登り窯しづかに冷えて草は実に
無傷なる空のあやふさ竜の玉

風音散歩

③ (二月号)

小林愛子

鴻臚館

幻影の館の礎石草もみち 中村千久

「幻影の館」と作者が指摘する鴻臚館は古代、筑紫(今の福岡)・難波・平安京に設けられて外国使節を接待した宿舎、国際交流の最前線であった。「源氏物語」にも登場する。

飛鳥時代後半から四百年間利用されたという、まぼろしの館を可視化したものが「館の礎石」で、出土された遺構の礎石や柱は保管されている。辺りに色づいた草紅葉は、悠久の時間を咲き継いできた。静かで、はっとする趣である。

登り窯しづかに冷えて草は実に 前田貴美子

登り窯は山麓の斜面にそって粘土で階段状に築き、下室から上室へ焼き上げる。薪を使った原始的な登り窯で1350度まで上げるが、ガスを使う現代的な窯でも至難の技という受け継がれている登り窯、火を落として「しづかに冷え」た窯に焼物師は疲れから解放される。足元はすでに晩秋の野の草草である。大きな実をつけた小さい草であった。

転倒の夫の強がり黄落期 吉中愛子

「転倒の夫」に驚いた、だいたい女性が転ぶものと思っていたのは固定観念だった。そして続く「強がり」に再び驚く

ことになる。心配する妻に照れる夫。折から街は黄落に入り、銀杏などの明るいダイナミックさを目を奪われてしまう。初老に入りかけた夫婦に、すこしコミカルな愛情が滲む。

師の墓辺霧の実たわわ日を弾き 松原智津子

「師の墓」とは沢木欣一、綾子の眠るそれを指している。「万象」全国大会の後、沢木家の墓参りをしたと聞いている。墓のある誓願寺は樹木に囲まれ、その中に薔は枝が揺むほどの実をつけていたのだ。溢れんばかりの赤い実に弾ける日の光り、将に師弟の深い絆を象徴していて感動的である。

袴着のさつと跳びたる水たまり 亀田やす子

「袴着」は男子五歳の11月15日に行う、初めて袴をはく儀式である。同じ日女子七歳の「帯解」の祝があり、近世初期まで、禁中・堂上に伝わっていた髪置、袴着、帯解が江戸の民間に普及。氏神に詣でる「七五三」の祝となった。

大人の思惑などどこ吹く風と、子供は無邪気、自分が大切にされるのが嬉しいのだ。袴を佩いて元気である。

ボール蹴る少年ひとり秋夕焼 榎本文代

夏の夕焼けは鮮やかであるが、秋の夕焼けは色も淡く、たちまち消えてゆく。水辺では行く秋の趣を感じるのであろう。ここは街中のわずかな空間、ボールを蹴る音が。「少年ひとり」が眼目である。澁淵とボールに戯れているが、時折少年期特有の物憂さが垣間見られる、秋の夕焼けであった。

同人作品

江見悦子選



札幌 岡本敬子

アツツ島玉碎の碑へ雪ほたる
曲り根にひと粒落つるおんこの実
新聞紙大きく広げ鮭おろす
荒縄で木を括るだけ冬用意
乱るるも屑になりても萩の花

札幌 林陽子

風立つ日鈴虫鳴かぬまま暮れて
一木に日矢差すところ薄もみぢ
ひと風に黄葉降りしく慰霊塔
落葉松にすがり一縷の錦蔦
日を吸うて脂まろまると新松子

札幌 落合裕子

秋晴や球音響く河川敷
鳴きもせで草の蔭より昼ちちろ
雀どち啄む庭の穂紫蘇かな
裏庭に林檎の実る女学校
神さぶる五葉の松に小鳥来る

札幌 濱谷和代

絵ガラスのあたたかみ増す秋日かな

帯なせる雲の黒さや秋湿
瞬く間色を失う秋の虹
落葉松の影濃くなりぬ秋夕焼
落日や尾花の波の大平原

札幌 大内 和 憲

朝露に肩濡れしまま往診す
身に入むや臥す人になき土踏まず
急患来釣瓶落しの影纏ひ
診察台はなれ夜長の貌となる
稽田に散らばる声のまた一羽

札幌 紅 露 恵 子

ほぐれゆく干菓子のおまし涼新た
開拓とともに幾歳栗実る
落栗の流れに乗れど水の底
常滑の甕に色草花手水
三趾鷗^{みづしぎ}万歳のごと羽広ぐ

札幌 大内 マ キ 子

黄落の真つ只中を走者発つ
月を待つ鼻緒のゆるき宿の下駄
露の夜の酌みては南部木挽唄

終漁を酌む海鳴りの鮭番屋
母の背のまろき記憶よ浮寝鳥

札幌 中 鉢 弘 一

対岸の栗の実までの丸木橋
開拓史刻む石碑に秋の蝶
紅葉降るチセの茅葺き屋根の上に
七五三抱かれて長き千歳飴
雲の端に茜たなびく今朝の冷え

札幌 北 浦 詩 子

倒木の陰に艶やか落葉茸
花を手に卒寿の独唱秋うらら
一点を見つむるゴリラ秋寂し
甘藷掘れば赤紫の長き蔓
雪虫の飛び交ふ白のやるせなし

江別 佐 藤 哲

秋の風分校廊下吹き抜けて
放課後は声張り上げて踊唄
奥蝦夷の暮るるを知らずそばの花
乳しほり百頭終へし良夜かな
暮の秋仔牛の乳房湯で洗ふ

江別 太田 佳美

満月の落ちて来さうな櫛の森
北大に銀杏拾ふ遊子かな
雌阿寒岳に一朶の雲や鳥兜
零余子摘み両手にちやうど収まりぬ
留守電の赤きランプやそぞろ寒

新潟 高橋 ひろ

まだ遊び足りない子らへ秋夕焼
うそ寒や猫が聴き手のひとり言
謝一字を墓碑銘として天高し
思ひ出すため足止むる草紅葉
栃の実を埋め百年後たのしみに

新潟 高野 松風

秋暑し在所訛のあつちーね
秋湿ふし目がちなる六地藏
※あつちーね……「あつち」という新潟の方言

無花果のうす皮余す嘴のあと
啄めば枝ごと沈む式部の実
てんでんと星のごとくに棟の実

益子 光岡 れい子

百歳の赤きマニキュア秋うらら

木の実落つ肩に背中にこつんこつん

秋夕焼襷くろぐろと遠男体山
けふの月子安地藏の影深し
紅葉づりて休田美しき箒草

芳賀 大村 かし子

妹の来るより早く栗拾ふ

紫蘇の実を揉む手の香る夕厨

山鳩の透き通る声秋気澄む

新米の炊き立て匂ふ玄関口

青青と稽田揺らす夕の風

宇都宮 阿久津 勝利

乱杭を取り合ふ朝の赤とんぼ

草庵の屋根へ葉の落つ松手入れ

秋の社日流鏑馬の矢の音唸る

寺町の堀に鯉棲む水の秋

長き夜や主宰の句集読み返す

栃木 上岡 佳子

月の兎雲のべールに見え隠れ

花野道歩幅広ぐる誕生日

タクシーを降る目印曼珠沙華

夕映えや動く影絵の赤とんぼ
白雲の湧きては千切れ夏の果

佐野 増田 幸子

錠剤を二粒づつに飲んで秋
秋雨をとばしつ廻す摩仁車
虫しぐれ近くて遠き生家かな
曼珠沙華十重二十重なり屋敷神
色変へぬ松の寂光中尊寺

佐野 加藤 季代

暮れ残る空の彼方を帰燕かな
人影に静かに寄り来冬の鯉
木犀の風を捕ふる猫の耳
裸木を渡る雀のよく弾む
枯菊の月日も焚けり子と二人

佐野 阿部 澄

夕鷺の群れなす刈田通り雨
稔り田に一族の墓沈みたる
栃の実を手手に八嶋めぐりかな
城跡や礎石の凹に草の花
鯉はねて桜もみぢの裏返る季

佐野 芝宮留美子

神木の抽んづる杜秋の蟬
秋澄むやつぎつぎ雲の千切れたる
ちぎれ雲低く流るる杜の秋
復元の櫓色なき風抜くる
鴝色の雲に弓張月透けて

佐野 島田 和枝

秋海棠八嶋をつなぐ石の橋
秋空へジャムセッションの風に乗
鬼やんま古民家の梁黒々と
むら雲に芋名月を惜しみをり
老いを知り老いを楽しく花野ゆく

佐野 売野 緑

刈田の香届く八嶋の裏参道
栃の実のこつんと神楽殿の屋根
澄む秋の煎餅屋の湯気もうもうと
櫛の実帽子飛ばして落ちにけり
ランナー過ぐ桂黄葉を散らしつつ

佐野 店網 洋子

神杉の枝に吹かるる烏瓜

赤とんぼ流れの速きちぎれ雲
爽やかや八嶋の杜を一巡り
まつ青な空に十月桜かな
側溝へ棒で導く穴まどひ

足利 大 木

茂

疎開児の床の落書小鳥来る
土瓶蒸し京に二泊の旅了はる
あぶれ蚊の耳元過ぐる女坂
仏具にも戦渦の名残そぞろ寒
酒樽の五段九列秋祭

土浦 澤

照

枝

星今宵女性杜氏は六代目
山麓の造酒屋や松手入れ
烏瓜引けば辺りの枝も引き
新蕎麦を切る音揃ふそば道場
廃校に菓子工房や地虫鳴く

加須 茂 木

弘 子

ゆつたりと戦ぐ芭蕉葉宮の朝
慰霊碑へ声を限りに法師蟬
走り根の裂け目に苔や秋の野路

トラックへ新薬ロール投げ込みぬ
迸る野川のほとり螢草

さいま 山 本 右 近

仲見世の裏ゆく癖や秋夕焼
笹舟の影のゆくへや秋惜しむ
影曳いて見廻る守衛虫の宿
月清し天窓高き京町屋
秋深む夕日に染まる忘れ潮

所沢 三 好 か ほ る

焼栗のあつあつを食ぶ高麗の里
高麗王を祀る社や鳥渡る
礫石積む旅人へ石たたき
鰯雲草食む山羊のつながれて
図書館の径せばめたる穂草かな

所沢 南 雲 秀 子

ドライブの先は新そば香る里
庭先の柿挽ぐ家族総出かな
胡麻干すや水車の廻る音ひびく
古民家の庭先に干す陸稻かな
雨に濡れコスモスの丘つやめけり

千葉 田 中 道 江

白菊のただよふ海となるゆふべ
宵闇の池畔に鯉のはぬる音
西郷忌非常停止のベル止まず
秋深し隣おとなふ女声
新米や甘さしみじみ天日干

千葉 松 浦 陵 保

爽涼や教職を辞し漁師繼ぐ
草紅葉蔵王の釜へ雪崩れたる
萩揺るる微かな風を捉へつつ
函館を望む岬や秋の潮
犀川に早白鳥の飛来せり

千葉 喜多恭仁子

月見酒術後二年を祝ひたり
文化祭見やう見まねの手話ダンス
割烹着出番となりし白露かな
深秋や一度上げたる湯の温度
免許返納歩け歩けと虫の声

千葉 大 月 玲 子

秋茄子傷ひとつ無き紺の艶

ふるふると掬ふ一口新豆腐
雲間より芋名月の薄明り
からくりの飛び技決まる秋祭
文化祭九十歳のフラガール

佐倉 大内佐奈枝

貌のなきウィッグ並ぶそぞろ寒
灸花ばりばりと引く女かな
露草の瑠璃ちりばめて馬柵の裾
二度三度跳ねて届かぬ烏瓜
三つ栗の真ん中瘦せて毬の中
秋灯下切手は小さき美術展

佐倉 三 屋 英 俊

蹲踞の水ふるはせて法師蟬
身に入むや入定塚の破れ御幣
パーティーに魔女もお化けもゐて良夜
相槌のあとの沈黙秋深し
はぐれ雁啼いて夜更けを通りけり

佐倉 横 川 良 子

三つ編みの応援団長秋高し
殿は未だ海の上翺雲

責任を問へぬA Iつづれさせ
石垣の反りを映すや水の秋
水澄むや滑車のすべりなめらかに

四街道

奥 太雅

封筒に記す花色種を採る
雨後の草の深きに昼の虫
あれそれで解る二人や衣被
山裾を飛び火のごとく曼珠沙華
鳥が植う紫式部白式部

四街道

塗 木 翠 雲

檻樓纏ひ睨みを利かす案山子かな
日輪へ裏返さるる落花生
一匙の塩で炊き上ぐ零余子飯
解れたる糸を紡ぐや秋の蜘蛛
鬼の子の腹を撥る風吹けり

船橋

山下 良江

名月のどこかに隠れ風の声
秋風の大海原へしやち跳ぬる
ガラス戸の隙に秋風しのび寄る
曲り角廻れば木犀かをりたる

秋空を自衛隊機の音高し

船橋

赤堀 洋子

枯れ近き蠅螂の翅艶やかに
枯蠅螂つつじの枝に逆しまに
くちなしの赤き実弾く大鴉
秋風が楽譜をめくる音楽祭
屋上に辛夷の赤実食む鴉

船橋

久保村 淑子

今日の月夫呼びたればもう隠れ
秋祭山車の引き手はマレー人
校庭の一隅に群れ彼岸花
豚汁のたつた三粒の零余子かな
猿橋の溪谷深く薄紅葉

船橋

片桐 帆一

無人店百円置いてさつまいも
鳩吹けどとぎれとぎれの己が息
一隅に母恋ふほどの曼珠沙華
そぞろ寒畳の縁に躓きぬ
雨音を寢床に聴く夜秋深し

船橋 宮本加津代

栗の飯はくはく病癒えにけり
萩ゆるる術後の二年恙なく
触れたれば手の切れさうな秋刀魚かな
新涼や和紙に整ふ巫女の髪
仏前に松茸飯のてんこもり

船橋 中嶋久登

路線バス団栗潰す音のして
彼岸花分家の墓へ続きけり
満天の芯に収まる秋の月
天も良し池に輝く月も良し
肩車して寄り道の通草採り

柏 山本とく江

一片の白雲浮かべ水澄めり
スカイツリー横たはる池鴨来る
枸橘の棘にたはむれ秋の蝶
振り返り渡る土橋や思草
割れ初めし通草の蔓をそつと引く

柏 内田郁代

棒高跳秋天高く蹴り上ぐる

ざはざはとして真夜中の鰯雲
秋の薔薇一輪女医の診察室
曼珠沙華古刹の土手を燃え立たす
鶏頭の紅鮮やかに恵子の忌

柏 古川京子

ずず珠の天辺はみな雀られて
赤とんぼダムの柵より吾が指に
音無骨なり湿原の鹿威し
木道を泥たつぶりの猪の跡
月牙ゆる胡弓の音の路地に消え

流山 穂刈照子

渡し場にかかる白旗小鳥来る
秋蟬の闇にぶつかる翅音かな
曼珠沙華火を消すやうに薬畳む
海の色抱き臭木の花は実
木豎豆の枝奔放に秋深む
緩やかに畳む便箋十三夜

市川 奥澤よし江

素肌から臍へと沁むる秋の風
初刈りの稲穂の醸す田舎酒

「うん」とのみ返す言葉やちろ鳴く

ひと雨に紅の整ふ水引草

大海原行く方定め鳥渡る

東京 名 和 政 代

三日月や自転車漕げるひたすらに

敬老日手形張り出す診療所

草踏んで草の色なるばつたかな

溢蚊をものともせず老い二人

秋刀魚焼く独りとなりて持て余す

東京 藤 田 裕 子

秋時雨灯さぬままに夕餉どき

残る虫聞くと眠れぬ夜のすさび

秋の蝶おのれどこまで飛ぶ気なる

窓ガラス拭く木犀の香の中に

いくたびも無月の空を仰ぎけり

東京 島 野 ひ さ

お出掛けの父と子の胸赤い羽根

独り身ももう二十年秋彼岸

新米の値札ばかりを見て帰る

洋式のトイレの蓋に月まぶし

秋深む秩父連山くつきりと

東京 加 賀 葉 子

色鳥やこもれ日の影華やげる

学校田畦に稲木を組み終へて

残る虫地中深きに鳴いてをり

無月かな団子真白に艶めきて

産院の入口ふさぐ花白粉

東京 久 留 島 規 子

いつまでも売れぬすつぽん秋彼岸

垣根よりお尻はみ出すくわりんの実

ひとからげ芋茎売らるる棚の隅

雪花菜買ふついでに二丁新豆腐

命日に初物の柿ひとつ買ふ

起き抜けに喉ひりつく寒露かな

東京 下 嶽 孝 一

秋風の路地銭湯の桶の音

忘れ物あるかに戻る赤蜻蛉

かなかなや生家に今も父の下駄

大川を火の帯にして秋夕焼

真つ新たな時間手中や日記買ふ

東京 岡村 純子

幼子と敬老の日の糸電話
石段を上りきつたり萩盛り
幼き日通ひし道や曼珠沙華
コスモスや肩を寄せ合ふ石仏
むらさきに雲変はりゆく秋の暮

東京 桑原 優美子

図書館の新村コーナー小鳥くる
お神酒所は老人ばかり秋祭
雑居ビル外階段に小鳥来る
銀杏の潰れし匂ひ教室に
隣家より木犀の香の流れけり

東京 三村 紀子

枯蠟 蠟頭半分黒ずみて
うす闇に秋蝶の黄や師の忌日
祝定年寄せ書き回る菊日和
寄せ書きに溢るることば金木犀
色鳥の横一列に棟瓦

東京 小池 清晴

今日の腰いざ軽々と紅葉狩

投函のポストの中へ秋日射
暮の秋老舗の足袋屋閉店す
秋時雨筵敷かれし丸太橋
口論の末の沈黙ちちろ鳴く

東京 一由久 美子

南極の氷グラスに月祀る
砂嘴の風はまなすの実を磨き上げ
開墾の斗南の大地大根蒔く
朗読のはじまる列車柿日和
土の香の山の茸の量り売り

武蔵野 砂地 宏子

父母の家は夢のみ彼岸花
登りゆく法会の寺の空高し
ほつれ毛を直す指先秋の風
青蜜柑剝く子の薄き爪美しき
開け放つ窓に青空小鳥来る

武蔵野 松井 宣夫

秋茄子に賽の目刻む夕仕度
甲府行き最終便は星月夜
秋耕やゆつくり進むトラクター

村芝居体育座りの子供たち
休耕田泡立草に呑み込まれ

立川 正田 華子

さはやかに流るる水のめがね橋
銀杏の実富士塚の注連ささくれて
初の鵲鞆堂の鍵新しく
首塚の土留めのくづれ萩は実
濁声の鵲二声暮の秋

町田 広瀬 俊雄

黒々と丹波の豆の届きたる
赤蜻蛉鳥除けの綱くぐりぬけ
鍬打てば螻蛄鳴く声のしずまれり
はやばやと桜紅葉の散りにけり
爆音の秋の雲切るきれぎれに

町田 桔 梗 純

原つばへ園児ちりぢり昼ちろ
切株に生えて小枝の薄紅葉
秋の宵黒き一団弓を立て
秋の蚊の翅音つきくる夕べかな
秋時雨彼方の町の灯のうるみ

日野 喜多尾 明子

雨来るか茗荷の花のほの明かり
稲掛やもう一束を押し込んで
日もすがら納屋に豆打つ媼かな
秋風や水面揺るれば吾も揺れ
秋の日に池に水湧くひとところ

横浜 西本 才子

かおかおと鵲長鳴く秋曇
湯上りに川辺を歩む無月かな
阿夫利嶺の朝より晴れて雁渡る
バス停へ崖道ながし葛の花
野菜売る裏に吹かるる破芭蕉

横浜 大橋 雅子

釣り人の前を二三度鰯飛び
リール巻く青年笑顔爽やかに
茅葺きの旧円通寺白桔梗
並木の裾金茶に太るねこじやらし
銀杏の実踏まれて匂ふ雨の道

横浜 田賀 樫 恵

散り際の萩にやさしき雨ひと日

小流れの木橋渡りて草の花
柿の実の色づき夕日捉へたり
街の灯のともりてわびし秋深む
今日のこと大方終へて栗を食む

横浜 三木 豊子

美術館一步出づれば初紅葉
フルートの音の澄み渡る神無月
丸葉の卓にころがる秋の暮
鰯雲あかねに染めて大入日
時雨忌や読み返したる師の句集

横浜 星野 信子

水底へ鯉の潜れり秋彼岸
皮剥けば十指を濡らす梨の汁
栈橋の軋む港や秋の声
薄暗き介護施設を出て秋日
湯屋帰り白粉花の紅の濃し

川崎 新妻 奎子

秋冷の一氣に丘を降りて来し
デイサーピスの迎へ賑やか萩こぼる
行平に茸いつばい煮る安堵

失せ物の出でて新米炊きあがる
骨壺と帰る道すぢ穂絮飛ぶ

川崎 大久保 進

取り分くる土鍋の焦げも茸飯
灯火親し湯吞ひとつの置きどころ
ねんごろに掬ふ一丁新豆腐
歩をゆるめ渡る神橋水の秋
居酒屋もタッチパネルに秋深し

鎌倉 恒川 清爾

祭壇に鶴の折紙十三夜
花野行く波黒々とオホーツク
秋高し背をはみ出すランドセル
すすけたる小さき仏像秋ともし
我が名記す古りし表札草の花

伊勢原 佐藤 和子

その中に一本白き彼岸花
庭に来て親しき声を四十雀
からからと掃かれて軽し椿の実
帰り来しジープの裾ゐのこづち
竹藪に鳥寝静まる十三夜

静岡 大村 峰子

駅長のひとりの駅を去ぬ燕
遠山の紫がかかる秋彼岸
煙草屋の軒擦つて翔つ帰燕かな
稲光千年杉の森匂ふ
大銀河湖の真上に溢れけり

静岡 海野 みち子

仔を銜へ歩く野良猫秋時雨
彼岸花今日命日の夫の墓
空蟬の殻はピンクに透き通る
行者径雨に破れし岩たばこ
猪除けの電源入るる諸畑

静岡 宮崎 知恵美

豊漁の秋刀魚の太き腹を選る
朝顔の地を這ふばかり放置畑
冬瓜の重きを赤子抱くやうに
畑隅の雨に倒るる花うこん
寄せ墓のまはり茗荷の花盛り

静岡 望月 敏男

札の辻どかんと座る残暑かな

バスを降り色なき風と擦れ違ふ
秋風にオルガンの音の渡り行く
落ち口の水押す鯉や秋の池
干し魚の骨透き通る秋の風

静岡 藤原 千代子

倒れざま種をこぼせり鶏頭花
山襷のよく見ゆる日や稲を刈る
茶工場の戸を開け放ち月の宴
手際よく太刀魚捌く夜勤明け
父の名の残る飯盒昼ちちろ

静岡 荻野 加壽子

胸うすくなりたる我に秋夕焼
思ひ出に脚色ありぬ林檎の朱
葛の花うすき眠りの昼さがり
林檎挽ぐいま雲を脱ぐ富士の山
秋深む言の葉探す一万歩

静岡 小川 明美

風神の袋膨らむ柿の村
敬老日祝ひの品は米ニキロ
洋館の集合写真秋ともし

鳩吹くにタイヤ遊びの檻の猿
ハイエナの檻を金風過ぎにけり

静岡 藤 本 節 子

谷川へ迫り出す軒やきのこ汁
秋雷や一喝どんと雨上がる
曼珠沙華咲きて季節の風変はる
文机に斑の躍りたる秋日射
ジーンズに拭ふ林檎の丸鬻り

静岡 大 長 文 昭

稻雀群れて飛びたつ学校田
どぶろくの菰着て育つ通し土間
みどり兎の手に一本の猫じやらし
彼岸花の畦ひとまたぎ母の郷
鰯飛ぶや水天宮の赤き橋

静岡 加 山 ひ さ 子

ベランダに仰ぐ夕星秋刀魚焼く
抱くやうに洗ふ墓石昼の虫
台風や製紙の町を洗ひ去る
未生りの糸瓜ばかりや子規忌過ぎ
夜なべせる父に苦味のチョコレート

静 岡 石 川 裕 子
焼き網にへばりつく焦げ秋暑し
まだ汚れ知らぬ朝の酔芙蓉

鈴虫や母なき部屋の桐箆筒
秋の夜や夫のつづきのクロスワード
庭の栗十粒ご飯に誕生日

静岡 本 多 ひ と み

秋澄むや水面に揺るる日の欠片
飛行場跡地一面真葛原
山腹を疎らに染むる初紅葉
秋晴や航跡に日の照り返し
蜻蛉舞ふ象の頭に藁の屑

静岡 杉 澤 修

琵琶の音を空へ沈めて月の雲
木も虫も寺に静もる無月かな
庵より香りほのかに月の庭
地芝居の土を踏むごと足拍子
芝居跳ね糠雨となる刈田道

静岡 松 永 博 子

新涼や水面割りたる鯉の鰭

どんどんと象の足踏み秋暑し
カプチーノくるくるくと秋を混ぜ
木曾駒の艶めく黒毛秋祭
れろれろと秋氣を舐る馬の舌

射水 成瀬真紀子

散居村四方より稲穂波寄する
母に吾に老後の時間金木犀
風に下り日差しに浮かび秋の蝶
夫恋へばことり戸が鳴る野分かな
立山は北斎の藍秋澄みぬ
鯊釣の等間隔の無言かな

金沢 今越みち子

整然と追腹の墓萩の露
白萩に隠れ地蔵の赤頭巾
秋夕焼窓辺の二人見合ひらし
とんぶりを小皿に盛りて山家かな
さはやかや見守り隊と子等の声

金沢 伊藤美音子

猿田彦地を蹴る草鞋在祭
面はづす少年剣士さはやかに

行合の空の水色鴨渡る
しやきしやきの新蓮根の白さかな
鼻唄に旅立たれしか萩の風

金沢 高田たみ子

海桐の実街を見渡す櫓跡
胡桃落つ本丸跡の小暗がり
城門の梁どつしりと秋深し
濃紺の連山映ゆる末の秋
姦しくせんべい食ぶる音も秋

金沢 豊田高子

夜なべの灯父の匂ひの着物解く
草の実を付けて帰る子泥匂ふ
星月夜からんころんと湯屋巡る
丸き背に夕日あかあか蕎麦を刈る
木曾馬と触れ合ふ麓蕎麦の花

金沢 松井佐枝子

母の忌や小さき桔梗開きたる
灯台をひと巡りして去ぬ燕
住職の遺骨をろがむ寒露かな
幔幕へ芙蓉の白の大らかに

小鳥来る仮名のおほきな迷子石

金沢 石川 純子

初さんま衣めくるやう身をほぐす
鬼の子の宙ぶらりと云ふ自由
生命線なぞりて老いの今朝の秋
城跡に走り根光る秋日和
盆栽のどんぐり落ちてしまひけり

金沢 河野 尚子

鮎ねたの秋刀魚に残る海の色
野紺菊地塘に映ゆる白き雲
能登山河いづこも葛の花盛り
鳥渡る地震に崩れし見附島
爽やかや広重の絵の藍の濃き

金沢 道場 啓子

実むらさき来し方不意に過りたる
ツリングのしんがり散らす蓼の花
路地奥の昭和めきたり韭の花
あきつ舞ひ緩き弧を描く水平線
浜万年青逝きし友の句口を衝く

金沢 杉本年 虹

稲つるみ乾きし街をしたたかに
茶屋に売る地物かまりの細き棘
一枚の影のごと群れ稲雀※かまもり……冬瓜(かもうり)のこと
虚栗掃きこぼし行く老庭師
郁子熟るるむかし八百屋の更地かな

金沢 南 恵子

長き夜や問ひかけにまた生返事
タイマー鳴る料理教室秋うらら
焼き上がるシフォンケーキや鵬日和
茶屋街をひと回りして帰燕かな
花野風足の向くまま来てしまひ

金沢 松下 信子

奥座敷に並ぶ遺影や菊日和
注文の一書届くや初紅葉
常備薬飲み忘れをり秋うらら
路地裏の日暮れ急かする秋風鈴
鳶の笛しきりに降り秋彼岸

金沢 北川 禮子

東雲の海へ水脈引く鰯舟

まだ青き木の実降る谷殉教碑
被災地の心を繋ぎ秋祭
千年の神木切られ秋深し
貼り替へし障子明るき朝かな

金沢 清水英理子

マイウェイ奏づる時計夜半の秋
伎芸天色なき風を纏ひけり
秋惜しむ余白を描く松林図
飛石のほのかな湿り十三夜
さやけしや軸に一途な句と俳画

金沢 松田好子

身に入むや父の骨集む娘らの背
対となり縄綯ふやうに秋の蝶
ひたすらに夫が皮剥き栗ごはん
割れ皿を積みたる窯場秋の声
良夜なる独楽吟とひとり酒

金沢 井端久子

落鮎へ投網を打てる雨合羽
秋雨に学習塾の灯の流れ
掛稲へ朝日満ちくる能登棚田

藁干せるガードレールへ赤とんぼ
和傘屋に柿渋にほふ秋の暮

七尾 谷渡末枝

封人の末裔稲架の櫓組み

※封人……国境を守る人

銀漢や語れば尽きぬ能登風土記
栗おこは四十九日の一の膳
板壁に十俵と書き秋じまひ
シベリアを語る眼差そぞろ寒

白山 加藤美栄子

さやけしや湯に繭をどる紬村
組の真ん中凹む豊の秋
秋の虹千古の山河よみがへる
半世紀握るマイクへ赤とんぼ
枯るるものみな輝かせ神の嶺

敦賀 倉谷ます美

眉月の海へ出でゆく漁舟
秋日和興入れ舟の祝ひ唄
鷹の爪宿場賑はふ鯖街道
敬老日人形焼を父母へ
伸べし手の先へ先へとちちろ跳ぶ

敦賀 鶴田 勝子

山寺の寺領赤赤唐辛子
肩薄き夢二美人や眉の月
小流れの葉裏にすがる秋螢
菊枕病上手の母なりき
バスを待つ灯下のベンチちちろ鳴く

敦賀 中川 雅月

背の丸き農夫精出す秋日和
魔除けにと娘に持たす唐辛子
単身の夫の荷物に菊枕
同輩の年忌法要秋彼岸
松茸の香を一面に荷を解く

敦賀 中村 優

満天の星に届けとちちろ鳴く
積み藁の中が棲家かちちろ蟲
萩刈るや三代続く散髪屋
畔切つてつなぐ棚田の落し水
ゆるやかに湧き水集む添水かな

話さずとも通づる仲間今年酒
敦賀 為永 香月 枝

単調な虫の調べに熟寝かな
星飛ぶや孫も曾孫も知らぬ夫
ちちろ虫翁の句碑に親しめり
新米や能登の塩ふるにぎり飯

徳島 福島 吉美

庭下駄に指の窪みやちちろ鳴く
荒筵納屋に敷きつめ酢橘干す
ふる里の円墳包む葛の花
帯なして棚田を仕切る曼珠沙華
無花果のみどりが匂ふ長屋門
粳穀を燐ふる煙門田這ふ

徳島 村上 和義

ジャングルに朽ちし戦車やちちろ鳴く
二の丸の櫓の跡に木の実落つ
灯火親し交換日記読み返す
海峡の風の渦巻く鷹柱
ひもすがら風に凭るる秋桜

徳島 宮西 修一

吊るされしままに幾歳秋すだれ
蔓引いて頭にかぶる朝の露

白桃をすすりてゐたる漢かな
花白粉こちらの路地も行き止り
糸のこ草しつば高々猫通る

徳島 平岡

功

白桃の香り仏間に充満す
河川敷光り波打つ草の露
無住寺の庭賑はふや虫時雨
土佐街道採りたて生姜貰ひたり
堤防に今燃え盛る曼珠沙華

石井 木内 マヤ

カーテンに十字架の影秋日伸ぶ
かまきりの三角の顔よく動く
文化の日父の前歯の抜けしまま
月見草月の光を孕みをり
教会のステンドグラス秋日濃し

小松局 岡田 あゆみ

一筋の潮目輝く残暑かな
初鴨の静かなる距離保ちをり
我の行く先へ先へと秋の蝶
また違ふ音色加はる虫の聞
統廃合進む学校鷹渡る

室戸 安岡 みさき

失業の子と巡礼し秋惜しむ
崩落の尾根道狭しそぞろ寒
酒臭き天狗の闊歩里祭
曼珠沙華ダム殉職の碑のほとり
ピアスして茶髪の若き秋遍路

松山 入河 大河

雷鳴のめりはりに聞くづれたり
汗かきつ句をひねりつつ道後の湯
朝霧や荒れたる畑の見え隠れ
探るやう舌震はする穴惑
四万十の南瓜の色の濃かりけり

福岡

宮田 千恵子

爽やかに正午のチャイム風にのり
風音の湿り広がる二十日月
まなぶたのゆつくり動き流れ星
夕月夜あしたは嫁ぐとなりの子
二輦電車ぼつんぼつんと稲架組まれ

長崎

丸本 祥夫

関の声挙げたる如き群れ蜻蛉
隧道となりたる峠芒原

奉納の山車が突つ込むくちかな
傘鉦の一足毎の鈴の音
頬張りて両手も柿の猿かな

宮崎 中山

宣

退院の夫の所望の零余子飯
四書五経薩摩の教へ小鳥来る
秋の川岩場に浮きをたぐり寄せ
枯れ松の社にすだく法師蟬
サーファーに二百十日の沖の波

宮崎 中山 芳

教

霧深し山路三又家二軒
手を合はす二百十日の風鎮め
をみなへし錦おりなす綾の里
竹の春胸突き百段招魂社
竜胆の柄の帯ゆく村祭

宮崎 鳥居 達

史

並べある椎の実古代文字のごと
ウクライナの力士爽やか一直線
柚子味噌や右党左党と老いにける
柏手のびるんと返る小春かな
田の神の御座す稽田瑞々し

那覇 中 本

清

吹きガラス廻して秋の膨らめり
手びねりの陶土重たし新北風来
エイサーの囃子の訛り風まじり
焚き口の陶土のかわき草の花
芒穂の孕む夕映え風立てり

那覇 辺野喜宝来

隣人の朝のあいさつ糸瓜棚
鴨日和乾さるる陶の影すがし
夕鵬のアンテナに鳴き杭に鳴き
三面鏡開きしままや酔芙蓉
稿一つ終へ三日月を遠くせり

西原 宮 城 勉

登高の西のアザナに国見かな
追憶のうすれこぼる宵の萩
赤蜻蛉そこは狩場か風に群れ

※西のアザナ……首里城の那覇一望の物見台

徴兵の無き世存へ月今宵
十六夜の沖雲抜けて匂ひやか

水脈淡く孤舟入り来る秋の暮

岩の間に秋づく海の光かな
登見城 渡真利 真澄

落ちきつて根方埋むる榕樹の実
伏し拝む太古の巖鷹の雨
赤蜻蛉壁の聖母に触れて去る
秋日濃し三線の棹並べ干す

（ベルシ） 鈴 木 波 江

大栗が真中に一つ釜の飯
折立のぬる湯に浸かり日短か
亀虫の壁より落ちて死んだ振り
ゆく秋の空にくぢらのやうな雲
すさまじや駅構内に朱の鳥居

謹 告

大津宗弘氏（同人・那覇）はご療養中の

ところ令和7年10月25日逝去されました。

享年82歳。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます

万象俳句会

毎月25日発売
定価1000円（税込）

月刊 俳句界 2026年 1月号

特集

一句啓上〜今年の俳句展望

緒方敬

中村和弘 三村純也

谷口智行

夏石番矢 村上喜代子

木暮陶句郎

吉田千嘉子 高柳克弘

百瀬一鬼

トラビエ 俳句界NOW 栗林明弘

特集「既視感」から脱却せよ！

○既視感の正体 依田善朗

○既視感をまねきやすいものとは？

金子敦 蜂谷一人

○私は「既視感」からこうして脱却した

遠藤由樹子 南うみを 月野ぼぼな

関悦史

投稿欄選者新春競詠

シリーズ 推薦！注目・期待する俳人②

手拝裕任 加藤かな文 鈴木午後 荒川英之

セレクトジョン結社「扉」野地邦雄

【注目の句集】渡井一峰『平明』

★新連載 「ことば抄」石井隆司

「人なつかしさの芭蕉」林誠司

「季節のいろどり」青木亮人

「俳人の本棚」若林哲哉

「俳句界」投稿欄 一流選者10名！
充実の投句欄

※一部変更の可能性あります。



株式会社 文学の森

お求めは... ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2 田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

同人作品の佳句

江見悦子選

急患来釣瓶落しの影纏ひ
 枯菊の月日も焚けり子と二人
 秋灯下切手は小さき美術展
 ざはざはとして真夜中の鰯雲
 緩やかに畳む便箋十三夜
 雪花菜買ふついでに二丁新豆腐
 真つ新たな時間手中や日記買ふ
 青蜜柑剥く子の薄き爪美しき
 庭に来て親しき声を四十雀
 思ひ出に脚色ありぬ林檎の朱
 末生りの糸瓜ばかりや子規忌過ぎ
 夫恋へばことり戸が鳴る野分かな
 飛石のほのかな湿り十三夜
 荒筵納屋に敷きつめ酢橘干す
 徴兵の無き世存へ月今宵

大内和憲
 加藤季代
 大内佐奈枝
 内田郁代
 穂苅照子
 久留島規子
 下嶽孝一
 砂地宏子
 佐藤和子
 萩野加壽子
 加山ひさ子
 成瀬真紀子
 清水英理子
 福島吉美
 宮城勉

同人会だより

創刊25周年を有意義な年に 同人会会長 中條睦子

令和8年の新年を迎え、同人会の皆様に謹んでご挨拶申し上げ、同人の皆様の益々のご隆盛をお祈り申し上げます。

また、新同人7名には、「万象」に新しい息吹を吹き込んでいって下さることを大いに期待いたします。

昨年は、内海良太名誉主宰、曾根 満前同人会会長の逝去という悲しみの年でもありましたが、4月からは、新役員での体制が整いスタートいたしました。

朗報としては、小林愛子名誉顧問の第3句集「くれのおも」が上梓されたことがありました。95歳というお歳とは思えない精神力に我々もおおいに励まされました。

10月の同人会総会では、以前から提案のありました、万象俳句会への支援金を停止、同人会費の減額についての議案が、満場一致で可決されました。議案提出に至るまでには、5月の幹事会での検討、その後、ワーキンググループを立ち上げ、念入りに話し合いを重ねた事を、ご報告いたします。

令和8年は「万象」創刊25周年という記念すべき年になります。四半世紀を俳句と伴に歩んでまいりました皆様と、親睦を深め、「万象」のより一層の発展に努めてまいりたいと思います。よろしくお願いいたします。

11月の「万象」オンライン同人句会高ポイント

- | | | |
|---|------------------|-------------|
| 8 | 庭石となりし石白十三夜 | 山本 右近(さいたま) |
| 7 | 初鴨のまだ群れ解かぬ眠りかな | 山本とく江(柏) |
| 6 | 勝馬の背に湯気立つ秋時雨 | 穂苅 照子(流山) |
| 6 | 栗剝くや思ひ出したるバスワード | 江見 悦子(東京) |
| 5 | フォークよりお箸が旨し文化の日 | 宮西 修一(徳島) |
| 5 | 天平の礎石に座して秋惜しむ | 神田美穂子(静岡) |
| 5 | AIのニュース訛るや文化の日 | 中村 千久(志木) |
| 5 | 日差し追ひ日差しに憩ふ秋の蝶 | 山本とく江(柏) |
| 4 | 国後の 遠き 島影冬 隣 | 大久保 進(川崎) |
| 4 | 行く秋や余白を語る師の墓前 | 山本とく江(柏) |
| 4 | セーターを一枚足して旅鞆 | 久留島規子(東京) |
| 4 | 秋日和猫が伸びたり縮んだり | 宮西 修一(徳島) |
| 4 | 抱き寄せて猫と夜寒を分け合へり | 三屋 英俊(佐倉) |
| 4 | 薄雲の通りて蒼き十三夜 | 沢辺たけし(千葉) |
| 4 | 師の墓へ枯れ高々と女郎花 | 江見 悦子(東京) |
| 4 | 紅さして齡忘るる温め酒 | 加藤美栄子(白山) |
| 4 | 野紺菊ひともと手折り墓仕舞 | 古川 京子(柏) |
| 3 | ポコポコと珈琲の沸く小春かな | 桑原優美子(東京) |
| 3 | 隠沼の黙解き放つけふの月 | 平岡 功(徳島) |
| 3 | ひよんの実は小さきオカリナ風の笛 | 三屋 英俊(佐倉) |
| 3 | しなやかに風のままなる秋桜 | 穂苅 照子(流山) |

(＊句頭の数字は点数を示しています)



今回も古今の佳句・名句に触れながら遊んでゆきましょう。空所にけもの偏(多)の漢字を入れましょう。

- 1 □の子がちよいと押へるおち葉哉 小林一茶
- 2 公達に□化けたり宵の春 与謝蕪村
- 3 たとふれば□薬のはじける如くなり 高濱虚子
- 4 綾子の手ゆびしなやかに□柳 沢木欣一
- 5 □肉の味噌煮この世をぬくもらむ 細見綾子
- 6 曳□の紐いっぱいに踊りけり 星野立子
- 7 冬に負けじ割りてはくらふ□の飯 秋元不死男
- 8 水飲んでさて□子舞のうしろ脚 内海良太
- 9 □動き月の光を移しけり 飛高隆夫
- 10 鍋尻がチカチカ燃えて□汁 富安風生
- 11 川石に鱗の乾ぶ□祭 棚山波朗
- 12 □犬の相寄らぬま、冬の暮 川崎展宏

【正解】

- | | | |
|------|-----|-----|
| 9 猫 | 5 猪 | 1 猫 |
| 10 狸 | 6 猿 | 2 狐 |
| 11 鰯 | 7 獄 | 3 独 |
| 12 狛 | 8 獅 | 4 猫 |

おいしい俳句

第11回 嵐山光三郎

ブラジルは世界の田舎むかご飯 佐藤念腹

ブラジルは親日国のひとつで、日本人に対する評価が高い。これは九十余年にわたって、この地に根ざしてブラジルの発展に貢献してきた日系移住者の努力によるところが大きい。

ブラジルの俳句は星野立子の渡米句旅行によってクロースアップされ、その中心が念腹であった。「ブラジルは世界の田舎」とは大まかな詠いぶりだが、そこがブラジル流表現で「さあどくるか」と目をこらすと「むかご飯」だったという。むかごはヤマモモに生じる珠芽で、葉のつけ根にできた腋芽が養分を蓄えて丸くなり、地上に落ちて新しい個体になる。落ちたむかごを蒸したものをむかご飯と呼んで豪快に食べていた、という。

三十年前、私はブラジルへ行き、赤道直下にあるベレンからアマゾン川を旅した。コーヒー豆栽培場で会った日系人オーナーが食べているのはパンであった。

念腹の句に「酔うて脱ぐ大きな靴や春灯」がある。念腹は足が大きく足の裏は革靴のように硬く大酒飲みだったというが、日系人経営者の長靴にはサソリが入っていたことがあるという。アマゾン川流域で暮らすのは命がけですね。

公益社団法人俳人協会

佳句佳句しかじか

同人作品鑑賞(十一月号)

沢辺たけし

手術場の涼気ガリバーがなじがらめ 岡本敬子

手術のときには麻酔をかけられる。麻酔が効いてくると意識はあるのだが、手足を動かそうとしても動かせない、何ともどかしい状態になる。それを「ガリバーがなじがらめ」と表現したのが面白い。そういう状態でも肌感覚は残っており、微かな風に「涼気」を感じたのだろうか、それとも、これから始まる手術に対しての一抹の不安を表す「涼気」なのかも知れない。

水平線 夏空の青海の蒼 紅露恵子

波打ち際に立つて見える5km先の水平線を横5kmに亘って切り取った場合、その角度はマイナス0.04度になるそうです。さて、掲句である。「青」と「蒼」の境の「水平線」が美しい。作者は北海道の方なので、北海道の「夏空」と「海」を見て作ったと思うが、読み手が沖繩の方なら沖繩の夏空と海を思い浮かべる。私は若い頃よく行った伊豆の夏空と海を思い浮かべた。句の読み手は自分の経験から景を思い浮かべることになるが、水平線の美しさは何処も変わらない。

漁火の真上に秋の月まろし 大内マキ子

北海道で「漁火」と言えば、夏から秋にかけての烏賊漁を思い浮かべる。暗い海に向こうに小さく光る漁火は幻想的で

さえあるが、その上に丸い「月」が出ている。「秋の」としているのは、夏とは違い秋の月だからこそその美しさを強調したかったのだろう。より印象的な句となった。

岩山を駆くる子鹿の斑の薄し 北浦詩子

「岩山」を駆け登る俊敏な「子鹿」の姿を思い浮かべる。

鹿は秋の季語であるが、子鹿は夏の季語になる。鹿の出産は5月頃が多く、生まれると子は直ぐ歩き始め、既に可愛らしい斑を背中にかけている。句に「斑の薄し」とあるが、鹿の斑は冬毛になると消えていくので、この句の景は冬毛の生え初めて間もない頃と思われる。

新盆の座敷和めり子に乳齒 上岡佳子

「新盆」とは人が亡くなって、四十九日の忌明け後に初めて迎える盆のこと。新盆では親族や友人が冥福を祈りながら故人を偲ぶものだが、そこに「乳齒」の生え初めた赤ん坊が連れて来られ「座敷」の雰囲気や和んだようになった。亡くなった命と新しく生まれた命の対比というより、暮しのなかで命を引き継いでゆく、その一齣のように思える句である。

龍淵に潜みし夜や深眠り 阿部澄

「龍淵に潜む」は中国出典の想像上の季語である。秋空の下の蒼く深い淵は神秘的な感じがし、確かに龍が潜んでいるように思える。この句、「深眠り」が面白い。眠っているのは龍か、人か、龍が潜んでいる湖沼か、川か、それとも町か、どれを採ってもしっくりとくる。

鬼薊種つぎつぎと風捉へ 芝宮留美子

薊には何十種類もあり、俳句では薊、野薊というと春の

季語だが、鬼薊、大薊となると秋の季語になる。掲句だが、「鬼薊」の種子の絮毛が風に飛んでゆくのを「つぎつぎと風捉へ」と「種」に意思があるかのように言ったのが手柄。白いふわふわとした絮毛が青空を飛んでゆく姿を想像させる。

空 蟬の雨に打たるる石畳 三好かほる

うつせみを「日本国語大辞典」で引くと漢字は「空蟬・虚蟬」で、第一義は「この世に生きている人。うつしおみ。うつそみ」とあり、第二義に「蟬のぬけがら。《季・夏》」とある。掲句だが、きつちりとした写生句で「雨」と「石畳」の効果もあつて「空蟬」の姿が心に残る。そして、第一義を意識すると句に更なる深みが増すようにも思えてくる。

G パンと短パン干せり鳳仙花 田中道江

昔は「Gパン」と言ったが、若い人はジーンズとかデニムと言っている。Gパンの名前の由来は省略するが、俳句をやっている年代の方は皆さん御存知のはず。さて、掲句だが、絵が面白い。そして「Gパン」と「短パン」二つのパンが句のリズムをよくしており、季語の「鳳仙花」がこの絵を一層鮮やかにしてくれた。

地球見む月面よりの星月夜 松浦陵保

大胆で面白い句である。1969年、月に行った最初の間は有名なアームストロング船長、最後に行ったのは同じアメリカのサニラン船長で1972年のこと。それ以来、月に降り立った人はいないので憧れとして、この句を作ったか。「月面」に立って、見上げる「星月夜」には「地球」が大きく青く輝いているのだろう。私も見てみたい。但し、月面の

真夜中の温度はマイナス170度とのこと、余程しっかりとした宇宙服が必要となる。

残暑かな壁に動かぬ夜の蜘蛛 宮本加津代

今年の夏は記録的な暑さが続き、秋に入っても更に続いていた。この句、上五の「残暑」に「かな」をつけてあり、この疑問を含めた詠嘆が効果的である。秋の夜、壁にじっとしている「蜘蛛」をみて、残暑のために動けないのかしらと思つた作者。蜘蛛に自分を重ねたのかもしれない。

帰省子へ何でも包む新聞紙 穂刈照子

「帰省子」に対する母親の気持が表れている。年に一度ぐらいしか親許に來ない子が、また去って行くときに親は少しでも不自由なことがないよう色々なものを持たせようとする。その時、重宝するのが「新聞紙」である。

万屋へ子の駆けゆけり青田風 砂地宏子

「万屋」は昔の田舎ではよく見かけたが、今はコンビニエンスストアが万屋と言えるのかもしれない。掲句、単純明快なのが気持よく、「青田風」が効いている。この季語により、白い半袖シャツの背中を膨らませて青田道を駆けて行く元気な子が見えてくるから季語の力は大きい。

白山をあまねく覆ふ天の川 加藤美栄子

スケールの大きい句。「白山」は富士山、立山と共に日本三霊山の一つである。石川県と岐阜県にまたがり、標高は2702メートル。この雄大な山を「天の川」が覆っている。山頂から仰いだ景でも良いのだが、おそらく麓から白山と天の川を仰いだ景なのだろう。実際の景を見てみたいと思つた。

追 伸

穂 莉 照 子

ゆるやかに光をほどく芒かな
飛ぶものにそれぞれの道空高し
新涼や握り返せる手に力
二百十日海灰色の声をあげ
大空を押し上ぐ風や竹の春
祝ふこと出来る幸せ敬老日
色鳥や枯山水に今日の波
木洩れ日は導火線なり曼珠沙華



籠といふ終の栖や月鈴子
総身に星匂ひ来る寒露かな
行く秋や沼しろがねに色を変へ
秋燕運河に羽を触れてゆく
冬めくや傷つきやすき水の面
追伸のごとく一輪冬薔薇
色抜けて軽くなりゆく落葉かな

光 陰 高橋ひろ

如月や人形にある土踏まず
につこりと一期一会の新茶かな
読みとれぬ奉納句額茶立虫
秋風や南瓜の型の石の椅子
碧眼の子も振袖や七五三
紅葉谷小滝いくつか隠し持つ
茶作りの仔細の屏風日淡し
炉の客の擱まへどころ無き話
影らしき影持たぬもの冬桜
千字文書き終へぬまま年変はる



生まれも育ちも新潟市。他郷へ出ることもなく市中の移り変わりをみて参りました。今回は県北・村上市のご案内を致します。村上市は城下町。その昔、転封された大名を慕う人々が共に移り住み発展した町だと聞きました。その頃のお店が今も商いを続けており、古い美術品が秘蔵され、人形さま祭、屏風まつりと美しい行事が続いています。北限と云われる茶畑もあり、その風味は細やか。村上の塩鮭は天下の逸品で、脂はほどほど。総身に浸透した塩加減がほど良く、枯れ皮まで美味い。村上の殿様が、鮭の皮を一反も食べたいと申されたそう。

菊 膾 小池 清 晴

打上げの注げば注がるる瓶ビール
食卓の鍋敷きに置く大西瓜
指を刺すおくらのうぶ毛見えねども
焼網の対角線に置く秋刀魚
仏壇に供へし柿の熟れゐたり
栗おこわ栗を数へて椀に盛る
柿剥くや蒂のまはりに残る青
病床の運ぶ箸先菊膾
秋深し痛み和らぐモカの味
はんぺんの膨れて縮むおでん鍋



带状疱疹の痛みの中で特別作品十句を選んでゐる。外出することままならず、秋を満喫できる状態でもない。家の中で秋が感じられるのはまず食べ物。美味しくはないが、薬を飲むために食べている。それでも、食べ物には確実に秋が来ている。仏壇に供えた柿は緑が消えて熟し始めている。食欲がない状態で箸が向かうのは菊膾。何かしている方が気が紛れて痛みも少し緩和する。そんな時に飲む珈琲は一瞬痛さを忘れさせてくれる。

布施弁天

山本とく江

向日葵に日へ向く遅速ありにけり

向日葵の花は太陽の動きを追う様に回ると言われているがこれは茎の生長期だけと聞く。開花後は東を向いていることがほとんどらしい。

しかし掲句にその様な説明はいらない。数えきれない向日葵の花の中の発見が中七下五に表現された。

風に堪へ風止む刹那散る蓮華

「堪へ」「止む」「散る」と動詞が三つ。動詞は二つまでなどと言う人がいるが、この句はその三つにより「刹那」が一層際立った。「蓮華」の有り様が見事に描き出された。

子鴉の甘え声抱く大樺

親と変わらぬ大きさになってもまだ可愛い声で親を呼んでいる。「甘え声抱く」で大樺に守られている鴉の子が思い浮かんだ。そして優しい眼差で見つめる作者も又そこに居る。

筑波見ゆ弁天山の蟬しぐれ

作句の舞台となっている紅龍山布施弁天東海寺は浅草寺弁天堂 江島神社弁天堂とともに関東三弁天の一つで、1200年余り前に弘法大師空海の御作と言われる弁財天を御本尊として開山されたそうだ。異常な暑さとなった昨夏、お元気に吟行される作者に蟬も又エールを送っていたのではないだろうか。

先日「万象」全国俳句大会に於いてユーモア溢れるお話してお姿に接することが出来とても嬉しい日となった。これから益々のご健吟、楽しみにしています。

鳥屋野潟

高野松風

猛暑日や枝の落下の注意札

ここ数年の暑さは身に堪える。それは生き物すべてに於いても言える。

俳人たちは季節の移ろいに心を寄せて句を生み出す。無論心地良いものだけでない。人や鳥たちに安らぎを与えてくれる木々もこの暑さに相当なダメージを受けていたのだろう。だがこういう場面も又句になるという事だ。

白鷺や一望の潟低くとび

鳥屋野潟を存じ上げなかったが市街地からさほど遠くなく、色々な鳥や春の桜や草花など四季を通して楽しめる所だとあつた。

そんな広々とした潟を「一望」、真つ白な鷺が餌でも見つけたのか「低くとび」で句に仕立てた。景が鮮明に浮かぶ。

下間や脩竹ぼつと日の明かり

鬱蒼と昼でも暗い竹林に急に日が射してきた。その時、作者の俳句心にも明かりが。「ぼつと」に、強烈ではない日の光が想像できる。

俳句は一瞬を詠みなさいと言われる。それを的確に表現した印象深い句である。

木洩れ日に身を大振りの夏の鴨

鴨の一種の軽鴨は、夏の間に日本に留まり繁殖するので夏鴨と言われている。湖沼をゆつたりと泳ぐ軽鴨に木々の間から日が差し込んでくる。その煌めきに鴨が身震いをする様を捉え一句に成した。「大振りの」が効いている。これもまた一瞬を切り取っている。

私のこの一句

一村を沈めて湖の良夜かな 阿久津勝利

奥の細道を巡るには交通手段（ウォーク・自転車・車・電車）と、日数・時間のかけ方により、楽しみ方も人それぞれだと思います。私も実際に細道を巡りたいのですが、体力的にもなかなかできません。そこで思いついたのが、細道沿いの各地で募集される俳句大会に応募することでした。時雨忌大会・黒羽芭蕉の里大会・柳まつり大会・俳句山寺大会・つるが芭蕉紀行大会等々。これらを通じ芭蕉が詠んだ句を読みながら奥の細道巡りを楽しんできました。

この句は、「つるが芭蕉紀行全国俳句大会」で杖措賞を頂いた思い出の一句です。

枝に掛けし囀籠より羽搏つ音 沢辺たけし

子供の頃、目白捕りについて行ったことがある。

朝早く起きて電車を乗り継ぎ東京近郊の山へ行った。山の中を歩き回り、目白の通りそうところの木の枝に籠を掛けるのだが、籠の中には囀の目白が居る。そして、その囀籠の近くに仕掛けるのが、鳥籠を巻き付けた細い棒である。

仕掛けが終わると近くの茂みに隠れて、目白が来るのをじ

っと待つのだが、囀籠の目白は急に籠の覆いをとられ、知らない場所の木の枝に掛けられて落ちつかないのか、鳴かずに二本の止り木の間を行ったり来たり、いつまでも飛んでいる。

祭牛賀茂の堤に長啼けり 藤田裕子

還暦を過ぎて知った俳句の世界は、この20年の私の生活を大きく変えてくれました。それまでの私にとって本やテレビで見えるものでしかなかった葬祭。行ってみよう、都心の美術館にでも行くいでたちで新幹線に乗りました。御所で出発を見送り、初夏の古都を楽しみつつ行列に付かず離れず上賀茂社まで。解放感と新しい人生のはじまりを感じる一日でした。その後たまたま手にした山田春生編『月別祭り俳句歳時記』の葬祭の例句にこの句を見つけびっくり。恥ずかしい限りの句ですが嬉しい記念になりました。

伊勢は晴れ伊賀は時雨の雲の下 奥 太雅

若い頃は千葉から故郷伊賀への帰省は一家4人で車を利用することが多かった。

年末帰省の為、東名高速から東名阪道に入り、桑名辺りで伊賀の八重垣山を見ると厚い雲に覆われている。

一方、伊勢平野は冬晴れの日差しが降り注ぎ対照的だった。嘗て芭蕉が伊賀上野から津への往来に越えた長野峠も、この雲の下にあり、その峠道で詠まれたのが「初しぐれ猿も小蓑をほしげなり」で、その句碑が峠道の脇に建てられている。

令和7年度「万象」同人会總會・ 全国俳句大会報告

令和7年「万象」同人会總會・全国俳句大会が、10月27日（月）にホテルグランドヒル市ヶ谷 瑠璃の間で開催された。参加者は83人。内訳は江見主宰、来賓を除き以下の通り。北海道6、石川7、富山1名、栃木6、埼玉3、千葉19、東京17、神奈川8、静岡9、徳島2、愛媛1、沖縄2。

令和7年度「万象」同人会總會 午前11時開始

- ・追悼の辞および黙祷 司会 林 陽子
（昨年度逝去された同人は、内藤恵子・河原昭子・内海良太・曾根 満の各氏） 柳澤 宗正
- ・同人会会長挨拶 中條 睦子
- ・総会議事 (進行 中條 睦子)
- ① 令和6・7年の活動報告 内田 郁代
- ② 令和6年度決算報告 小池 清晴
- ③ 令和6年度決算の監査報告 榎本 文代
- ④ 令和7年度予算案の説明 小池 清晴
- ⑤ 同人会年会費減額の件 中條 睦子
- ⑥ 令和8年度4月1日より同人会年会費5千円を3千円とする件を承認。

⑦「同人会名簿」の作成と配付については、今後継続して検討することとした。

・第7回中山純子記念俳句賞の表彰

俳句賞 正賞 「白山に雪」

準賞 「極月の水」

佳作 「おほばこの花」

特別賞 「初 午」

・江見悦子主宰よりお祝いの言葉

・受賞者挨拶

・閉会の挨拶

伊藤美音子（金沢）

神田美穂子（静岡）

成瀬真紀子（射水）

下嶽 孝一（東京）

今越みち子（金沢）

神田美穂子

沢田たけし

令和7年度「万象」全国俳句大会 12時15分開始

- ・開会の挨拶 司会 小池 清晴・久留島規子
- ・主宰兼発行人挨拶 実行委員長 中村 千久
- ・編集に関する報告 編集人 江見 悦子
- ・令和6年度会計報告および令和7年度予算案の説明 中村 千久
- ・監査報告 松浦 陵保
- ・会食・歓談 午後1時15分より 塗木 翠雲
- ・乾杯のご発声 福島せいぎ顧問・福島 吉美ご夫妻
- ・来賓の講演 「俳句の三要素」 橋本 清氏（「万葉の抒情」執筆者）

・各種の表彰と披露

☆第23回万象俳句賞 表彰

万象俳句賞 「尾を高く」

次点 「一日の春野」

佳作 「京ことば」

賞品贈呈とお祝いの言葉

受賞者代表 挨拶

☆令和7年度新人賞 表彰

令和7年度新人賞受賞者

賞品贈呈とお祝いの言葉

受賞者のお礼の言葉

☆令和7年度 新同人紹介

松永 博子(静岡)・松井 宣夫(武蔵村山)

松田 好子(金沢)・入河 大河(松山)

奥澤よし江(市川)・井端 久子(金沢)

辺野喜宝来(那覇)

励ましの言葉

歓迎の言葉

新同人代表 挨拶

☆大会作品集 入選句発表と表彰

大会作品集への応募総数658句、選者13名。江見悦子主宰、小林愛子名譽顧問、中村千久編集長はそれぞれ特選3句を含む30句、他の10名の選者については特選1句のみを披露。特選句にはそれぞれの選者の染筆が賞品として贈呈された。(大会作品集は11月号に合冊)

披露 大月 玲子・大久保 進

江見悦子主宰特選

小川 明美(静岡)・稲嶺 有晃(那覇)・中條 睦子(金沢)

小林愛子名譽顧問特選

中嶋 久登(船橋)・豊田 高子(金沢)・杉本 年虹(金沢)

中村千久編集人特選

谷渡 末枝(七尾)・店網 洋子(佐野)・下嶽 孝一(東京)

その他の選者の特選

成瀬真紀子(射水)・藤田 裕子(東京)・松田 好子(金沢)

大久保 進(川崎)・鹿毛 満子(柏)・佐藤 和子(伊勢原)

林 陽子(札幌)・前田貴美子(那覇)・喜多恭仁子(千葉)

・各地からの報告 司会者が各テーブルを廻りインタビュー

・閉会の挨拶

・記念写真撮影

副実行委員長 南雲 秀子

懇親会(二次会)

午後4時〜5時

2階美容の間にて

大会終了後、会場を移し、参加者同士の懇親を深めた。

最後に、記録・写真を担当の大木茂さん、会場への誘導を担当の松浦陵保、塗木翠雲さん、また大会準備から当日の受付などの運営を担当された砂地宏子、南雲秀子、穂刈照子、大月玲子、藤田裕子、一由久美子、桑原優美子、加賀葉子、村田由美子さん、ありがとうございます。そして、大会出席の皆様全員へ御礼申し上げます。

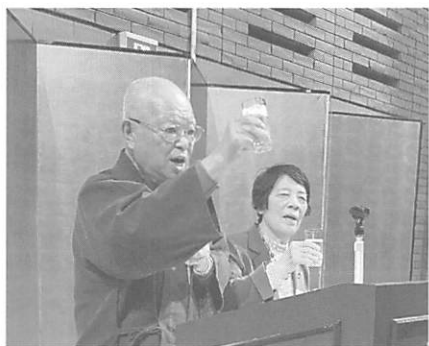
(記 小池 清晴)



中條睦子同人会会長



柳澤宗正 顧問



福島せいぞ顧問夫妻



橋本 清氏



参加者集合写真



「中山純子賞」受賞者（左から谷渡末枝、神田美穂子）による主宰の染筆披露



江見主宰(右)と「万象賞受賞者」(右から穂刈照子、辺野喜宝来、松永博子)



新同人紹介

(左から松永博子、辺野喜宝来、松井宣夫、井端久子、壇上・入河大河、奥澤よし江)



『くれのおも』

小林愛子

四六判・上製・カバー装
オリジナル

定価 2,750円

ISBN 978-4-86737-304-0

乗り越して見知らぬ町の月に逢ふ

乗り越した駅で戻りの電車待つことにした。時間を無駄にしたことを後悔しながらホームで電車を待っていると、月が出ていることに気が付いた。それを見ているうちに、失敗もまんざらでもないと思った。一期一会の月に出会えた喜びが胸に広がる。

作者は昭和五年生まれ。昭和五十一年に「風」に入会、沢木欣一・細見綾子を生涯の師とする。「風」の終刊後、平成十四年「万象」同人参加。現在「万象」名誉顧問。当句集は、作者の第三句集。句集には「風」で磨かれた即物具象の句が並ぶ。

〈欣一の寺の木の実をポケットに〉〈秋草を

この本この一句

篠沢亜月 (『しろはえ』共同代変)

ざつくり摘んで綾子の忌。「風」が終刊して二十三年、師の歳を越してなお師への敬愛の念、思慕の念は深まるばかりなのだろう。その「風」で共に研鑽を積んできた句友の死を悼む句も散見する。〈ふるさとを彼方に墓標鳥雲に〉〈薫風に鼻梁を高く逝かれけり〉〈咲き満ちて花野は色を失へり〉〈寒月に別れの杯を満たし置く〉。縁あって同じ結社で学んだ仲間を見送る悲しみ、無念さ、寂しさは察するに余りある。しかし、作者は「今日の続きとしての明日も、美しい自然を感じていきたい」と前を向く。「自然から存問される恩恵の広さ深さ(細見綾子)」を感じ続けることのありがたさを見つめる。

チューリップ垂直の茎残りけり

〈チューリップ喜びだけを持つてゐる〉と詠んだのは師の細見綾子だが、花卉は散っても緑色の茎は残り、その下には球根が育つ。真つ直ぐな茎に託された未来もまた喜びなのだ。「風」で培ってきた俳句を次代へとつなげていく句集である。

俳句カレンダー掲載句自註

令和8年版俳人協会「俳句カレンダー」に掲載された句と作者による自註を順次ご紹介いたします。

人日の電車に並ぶスニーカー（1月） 江見悦子

「人日」は新年の季語で正月七日のこと。上巳（雑祭）・端午・七夕・重陽と並ぶ五節句の最初である。「七日」も「七種」も季語として立項されているが、中国から伝わった「人日」が、日本では小正月の始まる日となり七種粥を食べる風習が広まったらしい。

新年初句会の朝、最寄りの私鉄駅から乗り換えて総武本線に乗った。秋葉原駅を出ると電車内はがらすきとなり、車輛全体を見渡すことに。乗客はみな一様にスマホに目を落とし、きよろきよろしているのは私くらい。ずらっと並んだ足元はすべてスニーカー、今日から人間が活動を始めるのだと妙に納得した。

私が子どもの頃の履物は、外出用の革靴、通学用の運動靴、日常は下駄ばきだったように思う。高校に通い始めて新しくローファーを愛用することになり、単純に嬉しかった。数寄屋橋行きの都電の停留所前が高校。ある時友人と終点まで都電に乗り、日比谷の映画館で「ブルーベの恋人」を見た。赤い絨毯の敷き詰められたホールには、主人公マーラの履いた10センチもあるうかという蛇皮のハイヒールが飾られ、その強烈さに溜息をついた思い出がある。

その後ハイヒールを履くようにもなったが、今はもっぱらスニーカー、足の保護を第一に考える年齢となった。

俳句

1月号
予告

12月25日発売

予価1,200円(本体1,091円)※

新年豪華競詠
7句・10句
◎エッセイテーマ
「すごい話」
総勢70名以上！

「新しい俳句誌」を語り合う

新春特別座談会

堀田季何×堀本裕樹×西村麒麟×神野紗希

合評鼎談
新メンバー

能村研三×恩田侑布子×小野あらた

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>) など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

子規の写生論の展開 (二)

高木良多

「明治二十九年の俳句界」ではその特色として「芭蕉の深遠に非ず、楳村の滑稽に非ず、蕪村曉台の蒼健典麗にも非ず、白雄蘭更の巧緻清婉にも非ず」、さればとて成美乙二の流れにもあらねば固より蒼虬梅室に似るべくもあらず、ほとんど全く種類を異にするものであるとして、新調の俳風が生まれつつあると指摘。古今の俳諧と比較して次第に新調の醸成されていく実態を詳述する。

子規はその新調としてまず、碧梧桐と虚子の句を挙げ、二人はこの新調の原動力であったとしたうえ、碧梧桐については「特色とすべき処は極めて印象の明瞭なる句を作るに在り。印象明瞭とは其句を誦する者をして眼前に実物実景を觀るが如く感ぜしむるを謂ふ。故に其人を感ぜしむる処恰も写生的絵画の小幅を見ると略々同じ」と前書きし、碧梧桐の

赤い椿白い椿と落ちにけり
乳あらはに女房の単衣襟浅き
葉鶏頭と鶏頭とある垣根かな
かんでらや井戸端を照す星月夜
などの句を挙げ、芭蕉の

夏草やつはものどもが夢の跡
名月や池をめぐりて夜もすがら
猪もともに吹かる、野分かな

あら海や佐渡に横たふ天の川

などの句と比べ、「俳句の空間的な所以は即ち形体の美に於て特に研究せざるべからざる所以にして、碧梧桐が印象明瞭の句を為すは俳句の上の一進歩と見るべきなり」と評価した。

また、虚子については、その特色として時間的俳句なるものがあるとして、虚子の

しぐれんとして日晴れ庭に鴉来鳴く
窓の灯にしたひよりつ拂ふ下駄の雪

のごとき句、また、

盗んだる案山子の笠に雨急なり
住まばやと思ふ廃寺に月を見つ

の句を挙げ、前二句を客観的時間、後二句を主観的時間のある句とし、去來の

上り帆の淡路はなれぬ汐干かな
應々といへど叩くや雪の門

など近世の句にも客観的時間が現れているが、単調の変動に過ぎずとし、「時間的俳句を作るは難きに、虚子が此等の句を作りしは難中の難を為したるなり、故に此点に於ける虚子の名譽は難中の難を為したる処に在り」と述べ、その成果を評価した。

(次号につづく)

『万葉集』にたずねる抒情の源流 ②

橋本 清

今回から巻五に入ります。長・短歌合わせて一一四首の雑歌を収めた巻です。作者は大伴旅人と山上憶良を中心に、すべて二人に関わる人々です。

太宰帥大伴卿、凶問に報ふる歌一首

禍故重疊し、凶問累集す。永に崩心の悲しびを懷き、
独り断腸の泣を流す。但し、両君の大助に依りて、傾ける
命を纒かに継ぐのみ。筆は言を尽さず、古今嘆く所なり
世の中は 空しきものと 知る時し

いよよますます 悲しかりけり

神亀五年六月二十三日

(五・七九三)

大宰府の長官大伴旅人が、都から二人の人物の連名で届いた凶問(訃報)に答えた漢文の書簡と、それに添えられた短歌です。日付の神亀五年は西暦七二八年。この時、旅人は六十四歳。当時としては相当の高齢でした。

不幸な出来事が重なり、訃報が相次いで届きました。あまりの悲しさにすっかり気落ちし、独り断腸の涙を流しております。ただ、お二方からのありがたいお悔やみの言葉のお蔭で、余命いくばくもない身を何とか生き長らえております。文章では意が尽くせないのが何とも残念です。

「この世界は所詮空なるものだ、と悟った正にその時、何ということだ、前にも増して切なくなってきたではないか。」

「凶問」は旅人にとって大切な人々の訃報でしょう。「両君」が誰のことを指すか分かりません。

「世の中」は仏教語の「世間」の和訳で、世界の意。「空しき」も仏教語の空の和訳と考えてよいかと思えます。世界にあるものはすべて永久不変の固定的な実体が無く、常に生滅流転するという思想です。そのことを次の作者未詳の歌は、常に満ち欠けしてやむことのない月に喩えています。

世の中は 空しきものと あらむとそ

この照る月は 満ち欠けしける

(三・四四二)

父の長屋王(天武天皇の孫)が謀反の疑いをかけられ、自死した天平元年(七二九)二月十二日、後を追って同日、殉死した膳部王を悼んだ挽歌です。

大宰府の地で、旅人が同行して来た妻に先立たれたことは、第25回(令和7年9月号)で触れました。それは神亀五年四月から五月頃のことと推定されています。長年連れ添った妻を失って間もない六月頃、意気消沈している状態からまだ抜け出せずにいた時、それに追い討ちをかけるように、次から次へと親しい人々の訃報が届けられたのです。

(以下次号)

万象ノオト



テーマ「車」

老いて益益

金沢 杉本年虹

私は長い間、ペーバードライバーでした。免許は取得したものの、母が昭和30年代から車を乗り回して、自分は乗せてもらう人だったからです。母が山間部の施設に入所してから、毎日通うには自ら運転しなければならず、必死になって運転いたしました。母の運転を思い出します。その頃はオートマチック車はなく、坂道発進が苦手な母は、坂の多い金沢の町では、幾つも坂を迂回しながら家路を急ぐ始末でした。

私が受験生の頃には「海を見に行こう!」と誘ってくれて、様々な所へドライブしました。今私は免許返納の日が何時か来ることを覚悟しながら、吟

行や句会やと、人生で一番車を多用しています。メンテナンスは夫任せで、洗車したこともなく、老いて益益盛んに動くには大切な相棒だと思っています。

日本人である喜び

札幌 佐々木 茂

「万象ノオト」ページを開き、本号のテーマ「車」に接した時、ひと昔程以前、電子辞書で本号と同じテーマ、「車」について調べたことを思い出した。電子辞書には「日本国語辞典」が収められている。「車」に関する同辞典の説明は、「①心棒を中心にして、そのまわりを回るようにになっている輪状のもの ②車輪をまわして動かしたりすすめたりするようにになっている乗り物や運搬具。」とあって、*印を付けて「正倉院文書―万葉仮名文(奈良)」「それ受けむ人ら久流末(クルマ) 持たしめて奉り入れしたまふ日」が続いていた。

奈良時代、1300年もの昔。唐文明の圧倒的影響下とは言え、前記のように文物を鋭く省察した日本に生を享

け、90余年を過ごさせていただいた。日本人に生まれた事に、唯々感謝あるのみ。

車に乗り始めて

敦賀 川口和代

今から18年前に大阪から敦賀に移住しました。その半年前に主人から運転免許を取るように言われ、もう還暦を過ぎたのにと思いながらやつと取得。大阪の家は地下鉄の駅の傍で必要なかったのです。しかし、敦賀に来て初めて、車なしでは生活できないと気づきました。

町には芭蕉の句碑や像が多くあります。先ずは車で氣比神宮、氣比の松原、金崎宮、色が浜、西福寺等「おくのほそ道」の足跡を訪ねました。この事が俳句を学ぶきっかけになり、あれから16年が経ちます。愛車で句会へ参加したり吟行に出かけたりする楽しみも出来ました。時にはテニス、語学教室など車あればこそと感謝です。

傘寿を超えた今、愛車との生活も安全運転で楽しみたいと思っています。

歌っておしゃべり

松戸 渡部洋子

数年前、ペランダの清掃中に腰と背骨を痛め骨折と診断され、歩行も大変で家事も儘ならぬ毎日となった。

そんなある日、コーラスの仲間と再会、市民センターで練習の女声コーラスに入団した。指揮の先生はとても熱心で、「さあゆくよ!」と言うと、終了するまで休みなくひたすら歌う。

その中に人のお世話が好き、車が好きという80代の方がいらして、「どうぞ」と車に誘ってくださった。車中ではおしゃべりが弾み、その方も運転しながら参加。大丈夫? と心配するもベテランの運転で心地よい。大いに歌っておしゃべりと、老体に喝が入る。以来三年経ち、腰も背中も少しずつ回復している今日この頃です。

車町

静岡 高井明子

静岡市の駿府城公園の近くに車町という町名があります。私の住む40件程の小さな町です。その由来は、今川・

徳川時代に遡り「牛車を置く場所」だったことに因るようです。

その当時、荷物運搬用に使われていたものを牛車（うしぐるま）と呼び、そこから車町（くるまちょう）になったと思われる。また左官職人も多く住み、鋳造師としても有名な森田鶴堂が、当地の興津彦神社に作品を残しています。

静岡には金座町、呉服町、両替町等古い町名が数多く残っています。先日このような町を句会の皆さんと楽しく吟行してきました。

「車」繋がりの「車町」の話。車が牛車だったとは……。今では、空飛ぶ車もあるというのに。

恒例初詣になったわけ

三鷹 植村康子

もう半世紀も前の春のことです。その日、他の家族は外出し、私は父と山口県 of 山陰海岸線をドライブすることになりました。実家から山口県は関門海峡を渡ればすぐです。麗らかな日で穏やかな日本海を楽しみながらの帰り道、走っている車は私たちだけでした。

すると突然、車が中央線を横切り始め反対車線に入ったかと思うと、いきなりガードレールが眼前に出現。あつという間に突っ込み、崖下に落ちる! と思った瞬間、切れていたガードレールの端に引っかかり、衝撃と共に停まりました。父の一瞬の居眠りでした。車を降りて呆然とする父と私。知らせを聞いた母は腰が抜けたそうです。それ以降、お正月には宗像大社に交通安全祈願に詣でるのが家族の恒例行事となったのです。



「万象ノオト」投稿募集

▽5月号「旅」(1月末日締切)

▽6月号「自転車」(2月末日締切)

▽長さ 本文 17字×19行以内

▽投稿先

〒417-0861 富士市広見東本町14-14

神田美穂子

巻頭作家（十二月号）プロフィール



鈴木 隆久
(佐倉)

鈴木隆久さんが、内海良太先生指導の「うす句会」に初めて参加したのは、平成30年6月。初回から「美丈夫の関羽の像や雲の峰」が内海保子先生と林昭太郎先生（句会に参加している『沖』の同人）の選に。私他3人も「真実は人の数だけアマリリス」を頂いている。7月の句会では良太先生の選に「遠雷や抱く吾子の脈忘られず」が。既に一定以上の力を有していた。その後、同人が20名以上いる「千葉句会」に参加。更に力をつけた。昨年の「万象」全国俳句大会では、「水馬六方を踏む空の上」が江見悦子主宰の特選に。同年の「万象」11月号

では4句、内（徴弘ふ書や青春の哀楽も）が佳句に。本年1月号でも4句、内（黙読の唇うごく夜長かな）が佳句に。2月号、4句で「溪谷の闇を深むる星月夜」が佳句に。3月号、4句で「ストーブ燃ゆ非戦を語る一家族」が佳句に。10月号4句で「砲火いま噴くことなけれ夏の蝶」が佳句に。遺憾なくその実力を発揮している。そして今回の巻頭。

俳句は、平成25年退職を期に「千葉県生涯大学校」に入学。その「俳句クラブ」に参加したことが俳句作りのきっかけ。小川恭生氏の指導を受ける。その後「風」の元同人安田三代子氏の句会に参加。その後「万象」へ。趣味は俳句の他に、江戸時代の歴史と文化。よく博物館に通ったとのこと。マラソンも趣味で、全国のマラソン大会に出場したという。

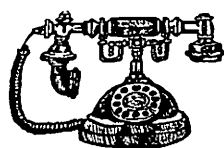
隆久さんはここ数年、「佐倉俳句連盟」の事務局長として、年2回春と秋に開催される「佐倉市俳句大会」を成功させる為、骨を惜しまず頑張ってくれている。俳句仲間には皆感謝。

さて結びは「万象」会員の奥様美根子さんのことを少々。隆久さんと美根子さんは一緒に俳句を楽しむ鴛鴦夫婦。出身も同じ金沢。今年の1月号では隆久さんと並んで4句欄に「化粧されふふ笑顔の敬老日」が佳句に。

隆久さん、これからも美根子さんと仲良く俳句を楽しんでいって下さい。

（三屋英俊）

万象作品



江見悦子選

○は佳句に選ばれました。

何となく今日はよき日と秋の薔薇 東京 高野翠子

秋日和杖曳く靴の新しく

○黙す間の風ゆるやかに秋団扇

顔そろひぷりんと揺るる新豆腐

耳奥に残る波音秋没日 佐倉 鈴木隆久

追憶といふ美しき距離星流れ

○燦燦と川面を跳ぬる秋の声

街中の芥吐き出す秋出水

願掛けの札ふところに秋遍路 金沢 宮崎恵美

○秋深し加賀友禅の雨山の絵

逝きし夫銀木犀の香に眠る

秋気澄む能面六十並ぶ寺

鉦叩言ひたき事があるやうな 福岡 園田清子

○読み返す八雲の日記秋ともし

五歳児の背中まあるく栗拾ふ

完売の月見弁当 秋祭

○握る掌に術後の温み明の月 那覇 稲嶺有晃

再びの妻の眠りや秋桜

病院へ秋風の道渡りけり

冷えてゆくアールグレイや蔦紅葉

青空に焰立つごと曼珠沙華

茅ヶ崎

久保田富士子

墓塚に影を添へたる夕日かな

○川岸に乳張る山羊や秋時雨

枳殻の実ころがしあへる下校の子

秋うらら卓に俳誌の九月号

新潟

榊原キヨ子

敬老日口あたりよき薬膳酒

○伴僧の囁れ声や秋彼岸

木洩れ日に右へ左へ秋の蝶

野分後ニセコ山麓すつきりと

札幌

石田

睦

秋の森レース模様の虫食ひ葉

濃き薄きサルビアの原列なして

柿抱へ山門くぐる法隆寺

島崎

洋

石狩の河口の廃船草紅葉

小春日や前歯小さきあくび猫

すすき原眩しく寄する穂波かな

杉山和廣

長き夜やチェーホフ全集赤表紙

兄おとと鯀突きしは昔かな

秋の蝶木立を抜けて帰らざる

杉山鈴子

空を掃く風過ぎゆきて秋の雲

小夜嵐雲けちらして月走る

秋天と大地を繋ぐ噴煙柱

札幌

園田鶴子

開拓を偲ぶサイロに小鳥来る

今年米先づは仏器に高々と

ふんはりと透けて帚木紅葉かな

竹重富子

草の花生けて舞台の華やげり

名月や町の会合終はるころ

見得切つて歌舞く園児や豊の秋

田邊政代

豪快到唐黍茹づるドラム缶

蝦夷栗鼠の毛色の変はる冬隣

夕飯の食卓に乗るマスカット

土門一平

秋澄むやソファーに伸びる家の猫

長き夜や旅行計画三日分

柿吊るす日の当たる縁いっぱいに

土門一

長き夜の収穫の宴賑やかに

○秋草の強き香りに命あり

白秋や慈恩寺守る天井絵

新庄

曾野部礼子

萩の花慈恩寺めぐるバス吟行

秋空へ時刻む音時計塔

夏つばめ岩むき出しの最上川

大江

安藤桂花

○夕風に頬撫でられて大根蒔く

水郷の町の夜空に大花火

草は実に源流の碑は杭一本

仙台

富田洋子

主なき庭にひと群螢草

小筆買ふ御譜代町に萩の雨

秋晴や細身の彌宜の腕まくり

新潟

齋藤 信

潮風に文字なき石碑暮の秋

踏切の枕木の浮き秋桜

せはしなき京都の会議場の蟬

カフエの夏隣の席の子の談義

朝涼や産土神へ脚軽く

山田季聰

○着陸の機影包むや秋ともし

精米所雀ついばむ今年米

人参を添へて手料理整へり

燕

渡辺志ま

○乗り継ぎに小半時ありいわし雲

秋の蛇膨るる腹を伸ばしをり

廃校のゲートボールや金木犀

芳賀

稲川清子

秋蒔きの大根の畝に土寄する

曼珠沙華墓への道をかきわけて

秋桜倒れあらたな風生まる

福武幸子

新米の踊り出したる土鍋かな

線香のたゆたふ墓前秋日和

空澄むや親子庭木を刈り込める

鹿沼

渡辺利子

下草を刈りて始まる栗拾ひ

○柿日和庭に幼の三輪車

三連の神鈴の音秋高し

栃木

飯塚キミ

銀杏や足いたはりつ歩きたる

無花果の皮はやつぱり剥きがたし

凌霄花舞ひ散る今朝の通学路

佐野

木村君子

刈り込める芙蓉の枝葉山のごと

猛暑日の階段幾度駆け登る

木洩れ日や水辺彩る秋海棠

仲山さよ子

稽田に黒きかたまり夕鴉

シャンソン果つしばしほてりを秋の風

縁切寺雨に色濃き山桔梗

義本美智江

秋茜銀翼の音遠ざかる

○コスモスや棟上げ式へ酒提げて

天上へ届けとばかり虫の声

志木

汐見克彦

いわし雲漂ふ空をはぐれ鳥

かはほりのつばさ音無く風切れり

○あした咲く蕾を残し木槿散る 志木 森山洋之助

救急車立ち去る後の虫時雨

ふる里は茅葺きが消え曼珠沙華

大仏の膝に降りたる赤とんぼ 新座 多田英治

彼岸花埋め尽くしたり高麗の里

○長き夜の夢は飛んだり走つたり

長き夜や打つては削除恋の文 千葉 高田みや子

下校児の地蔵に野菊そつと置き

水澄むや大河信濃に橋の影

晩年の引き際難し柿熟るる 高田みや子

熊鈴の熊呼ぶやうなきのこ狩

草の花無名兵士の墓朽ちて

子の夢は宇宙飛行士豆を蒔く 加藤浩子

しぐるるや湯治場の窓くもりたる

○煮大根髓甲色に日の暮るる

蚯蚓鳴く古米古古米古古古米 加藤浩子

長き夜やなかなか鳴かぬ鳩時計

野菊一輪分校の教卓に 酒々井 小林あけみ

熱帯夜サイレンの音残りたる

発進のハンドルに跳ね子蟬螂

山積みの冬瓜売られ長屋門

絵本へと戻りさうなる色鳥来 佐倉

新谷八郎

新薬の香を積み車戻り来る

秋の畑鋤を振るへば老い知らず

満月やうさぎの孫の生まれさう

有泉正夫

秋日和鳩に徐行の荒川線

母の居る厨明るき良夜かな

亡き父の好物なりし衣被

杉田富美代

香しき新米炊けて仏壇へ

湯ぶねまで闇の中より虫時雨

秋彼岸我が名呼ぶ声空耳か

鈴木美根子

かぶりつく顔より大き西瓜かな

新涼や包装紙の角くつきりと

きちかうの色深まりて切り花に

米田敏子

めづらしきゴーヤーの白収穫す

大木にハンモック吊る心地よさ

船橋

近藤澄子

初夏の旅夫の遺影を胸に抱き

風鈴のやさしき音や昼下り

夏落葉あまた隣の公園に

久しぶり秋刀魚を食つて牛負けた

山口秀吉

敬老日初めて届く商品券

秋風に葉擦れの音の乾くなり
筑波山よりぐるり見晴らす稲の秋

柏

鹿毛満子

掛け声のひとつになりて神興ゆく

秋光や水面にゆるるスカイツリー

村田由美子

〇はたはたの草の色して草の先
開け放つ風のやさしき良夜かな

赤とんぼ青空映す潦

門前の井戸端会議虫集く

松戸

石川幸子

秋の蝶不意に過りて中天へ

秋の蚊の頬杖つきし二の腕へ

蓮根掘時々腰を伸ばしけり

菊岡緋路

大雨にもたれあひたる案山子かな

さやけしや鯉の模様の鮮やかに

自転車の弾んで虫の小道かな

寿多映子

〇逆上がりくるりコスモス蹴り上げて

高原の霧の底なるロッジの灯

黄昏の空いつばいの鰯雲

夕闇をまとふ鶏頭紅深し

渡部洋子

笹藪に群れて明るき曼珠沙華

ぱりぱりといぶりがつこを食む夜長

東京

安藤美酒々

待宵の彩りのよき和食膳

十六夜もたうたう姿あらはさず

〇慰霊船南へ船出盆の月

大場八朗

さるすべりちりめんじわの白き花

おしん見る夏日は雪のシーンかな

浴槽に曾孫の遊ぶ浮人形

蕪木静子

父母達の今年も来たる門火かな

闇戻る火祭終はる富士吉田

北口富栄

高台の仮設住宅秋の風

赤屋根のコテージ目指す霧晴れて

モネの池でふ名の池の水澄めり

齊藤孝夫

鱗雲皮膚科帰りの空一面

野球帽被り直して夏終はる

〇秋の暮地図帳辿るボールペン

鶴田智美

秋彼岸串だんご食べ母恋ふる

敬老日五歳の孫より葉書来る

彼岸花池のほとりに炎立つ

中澤桃子

喜多院に靴脱ぎ拝す紅葉山

秋日和六人乗りの乳母車
老残の話の止まぬ温め酒

東京

橋本紀代子

山の辺の行きも帰りも曼珠沙華

長谷川信也

赤とんぼ群れを外れてホバリング

強面のはかに変はる踊かな

平子甲奈

散策の友の計報や彼岸花

鯛焼に飢ゑしその頃苦学して

チェンバロの鍵盤に射す秋日かな

秋の日の楽譜をめくる指の撥ね

秋の服昭和レトロの花の柄

いなびかり後の轟音に飛び上がり

美術の秋和服の男門に入る

秋日和土手を散歩の杖ついて

彼岸花たんぼの畔に一直線

初さんま二尾を夕餉の卓にのせ

秋空へ妻のアリアの響きたり

いつのまに蟬の声絶ゆ昼下り

調布

荒井 仁

ガジュマルの緑蔭に古る神アシャギ

※神アシャギ……祭事を行う小屋

白蓮に残る雄蕊の青き影

落葉松の黄葉高原列車行く

三鷹

高尾早弓

○さやさと落葉松に霧巡り来る

早稲の波普通列車を乗り継ぎて

秋祭商店街に法被増え

南場雅子

休日の昼のパズルや秋うらら

コーラスの音外れたり秋の昼

雨もよひ半分けぶる揚花火

府中

竹村晃子

空青しやうやく見つけ烏瓜

包丁研ぐ秋刀魚一尾のいぶし銀

鬼やんま息ころす子に気付きをり

日野

松原悦子

秋晴の空は空つぽ峰光る

大樹海一氣に霧の海と化す

見上げたる崖より葛の蔓伸ぶる

青梅

横井一美

夏草の売物件の字を隠し

庭先のきれいな空き家金木犀

重陽の夕餉に鯛の昆布締め

横浜

大駒泰子

虫時雨富士の麓の町に来て

信号待ち肩まで迫る蔦の蔓

雨上がり秋空暫し見てゐたり 横浜 岡 元枝

秋日和園児の列に手を振つて

聚熟れ主不在の門構へ 秋の湖へ水陸バスはしぶき上げ 松田 古谷悠紀子

赤と黄の桜もみぢの葉かな

ぶだう狩子に連れられて小さき旅

鰯雲仰ぎて猫の逝きにけり

加藤和子

育ちしは海近き街夾竹桃

白萩や子猫の外す首の鈴

竜淵に潜めり池の草揺らぎ 静岡 飯田優子

○釣りたての秋の鮎下げ獣医来る

秋の晴孫と歩合はす猛獣舎

秋暑し沖繩の波透き通る

坂本具子

柵越えて萩に触れたる象の鼻

師の給ふ橡の実重きたなごころ

○菊日和仁王の眉のびくと跳ね 伊東文恵

コスモスや昭和は遠き想ひ出に

柴田雅春

風神の袋に残暑閉ぢ込むる

同窓の第九奏づる秋日和

柴田雅春

洋館の玻璃に溢るる秋の空

一八の淡きむらさき庭の隅

柴田雅春

富士を背に稲穂輝く棚田かな 海野俊彦

純白の山吹ひらく母の窓

長野高朋

爽やかや風の芦ノ湖畔巡る

酔を加へ冷し中華の味ゆたか

長野高朋

バス停のずぶ濡れの列野分だつ

収穫の期待に応へ稲の花

長野高朋

○新走り切子の猪口にあての塩 杉田義則

○故郷は山多き国星月夜

長野高朋

合の手は下駄の歯音や盆踊

ビルの間より朝日差す葉鶏頭

川崎 横山ユキ子

山里の空裂き星の走りたり

早朝の窓すこし開け金木犀

川崎 横山ユキ子

榎檀の実福相貧相陽を浴びて 杉山千鶴子

○木道の何処かがたつく草紅葉

伊勢原 山本カツ子

白無垢の似合ふ嫁様菊日和

湿りたる土に灰撒く厄日かな

伊勢原 山本カツ子

大ぶりの秋茄子二本買ひにけり

教会の尖塔光る醉芙蓉

伊勢原 山本カツ子

月欠けて銅色に燃えにけり 杉山巳代

潮の香を纏ひ花野を歩みけり
磯鳴の河口に羽を繕へり
秋光や吾子初めての動物園
宣教師館の一隅曼珠沙華
初紅葉一人阿弥陀と対峙して
錆びつきし水車の軸や野紺菊
群れなして鳩の啄む刈田かな
笹を抱き風のままなる葛の花
近道を選び路地裏の夕月夜
虫の音を引き裂くやうに救急車
登呂遺跡右に左に稲穂波
夕暮や芙蓉の紅の濃くなりぬ
花茗荷這ひつくばつて探したる
秋蝶の追つて纏れぬ二匹かな
登呂の田や貫頭衣着て水落とす
教卓に埃うつすら休暇明
従兄弟会丸子の里の零余子飯
長き夜の葉の頁進みけり
田色づく四方を荒れ田に囲まれて
秋霞纏ふ車窓の芙蓉峰

静岡

高井明子

高橋一夫

田中秀幸

筑地裕子

内藤允昭

中澤祐一

身に入むや山門抜くる里の風

静岡

永田公香

○罇深き仁王の踵初嵐

秋暑し鯉は悠々泳ぎたる

野崎浩子

中庭に七輪の煙秋刀魚焼く

寝そびれてちちろの声を数へたり

狭霧立ち山すつぱりと白となり

長谷川洋子

稔り田のビルの谷間に香りけり

○病院のベッドの堅き子規忌かな

秋分や腹に雲巻く青き富士

矢野喜久江

赤蜻蛉堤に響く鉄の音

階の馬追しばし見てゐたり

町中の此処も彼処も彼岸花

焼津

小梁洋子

休田に咲き盛るなり秋桜

八雲の碑行きつもどりつ帰燕かな

木の箱のすくもに探る紅林檎

掛川

鈴木美由紀

涼新た先づ靴洗ひ旅支度

笑栗を踏むやころりと箕の中へ

掛川

鈴木美由紀

今日の月たゆたふ雲を纏ひけり

新米を食す贅沢独りの卓

金沢

上野富貴子

新盆の納骨堂のミストかな

甦る富山空襲敗戦忌

栗ごはん皮むきし手に小さき傷

金沢

北野陽子

名月や明るき夜に手をかざす

干柿を作りし人の今はなき

電線を廻りて今朝の帰燕かな

新出祐子

騒動のさなかに届く今年米

還暦の帯に名句や文化の日

松手入れ霞ヶ池に小舟寄せ

菅原雅子

霊峰の水をくぐりて新豆腐

爽やかや富士風穴へ坂下る

竹林や秋を奏づる風の音

田上ナツ子

津波あと残る家屋や珠洲初秋

鳥渡る土あらはなる軍艦島

久方の慈雨には遠き雷雨かな

かほく

能任康子

連日の続く警報秋暑し

○竜田姫の衣擦れ未だ里の木木

御仏供杉ぐるりめぐるや赤とんぼ

白山

朝倉みゆき

薪高く外壁包む冬支度

※御仏供杉……白山市のさかさ杉

コスモスの畑に続けり赤黄白

大空へ道なき道を去ぬ燕

鶴尾正江

秋霖の幾日村をけぶらしむ

秋の暮鴉群れ行く畴かな

邯鄲やひと日を終へし焼物師

敦賀

川口和代

ゆらゆらと両部鳥居に秋螢

秋澄むや故郷の香り届き来る

子規の忌や俳句案じて一日終ふ

奈良

町田すみれ

公園の闇に虫の音戻りをり

秋祭大喝采のやりまはし

源流は母郷の深山下り鮎

小松島

田上幸子

水澄むや転がし運ぶ睡蓮鉢

単語百すべて正解小鳥来る

蟬しぐれうぶ声高く子の生まる

徳島

林 早苗

百日紅咲ききつて塀こぼれ落つ

堅き蔓絡む通草の青さかな

○人集ふ街角ピアノ今朝の秋

大好きなシヨパン聴きをり爽やかに

待ち合はせからつと晴れて秋の空

蒼天へ燃え立つ土手の曼珠沙華

山本瑤子

病む姉に塩キャラメルを買ふ白露

爽やかやきのふと違ふ今朝の風

豊漁や皿はみ出せる初秋刀魚 福岡 鶴田輝代

白木槿ボン酢和へして昼餉かな

名月の飛行機雲に触れさうな

腕白の煌めく瞳夏休み 大宰府 美山留唯

捨て難き油彩の道具アマリリス

沖繩の少年兵や敗戦日

土砂降りを船に乗り込む瀬祭忌 那珂川 高山ひさ子

団栗を蹴る新しきスニーカー

地図帳に付箋びつしり秋の旅

夢で逢ふ母は快活秋彼岸 門川 請関ゆかり

○赤牛の尻尾ゆらゆら秋うらら

牛の背に休む鴉や秋日和

月照らす櫟林に影二つ 国富 山口孝治

城跡に昔と同じ秋の声

震災忌机の下の真顔かな

まどろみの猫や白露の天女橋 那覇 大城末治

日時計に秋分の影際立てり

たつぷりと木立の揺れや星月夜

母も居し彼の日の朝実南天 高嶺容道

○満州の写真の母や鷹渡る

ほろ酔うて路地裏の月探しけり

吊るし売る帆布靴や小鳥来る 宜野湾 宜野

きりぎりす掩体壕の翳の中

葬場に会釈の人や秋日傘

秋蟬やむくろに黒き肢留め ペリシ 森尾

嬰あやす婆の笑顔や秋祭

フラガール踊る色なき風の中

舞

踊



今後の新中央句会の予定

▽1月25日(日) 東京文化会館 中会議室

▽2月22日(日) 東京文化会館 小会議室

13時より

13時より

北から南から

旧新潟税関庁舎への吟行

新潟 高野 松風

新潟俳句会は、月例会の会場である中央公民館の近くの旧新潟税関庁舎・湊稻荷神社にて吟行会を行った。

みなとまち新潟 全国有数の流域面積を誇る信濃川と阿賀野川という二大河川の開口部に開けた都市。江戸時代、北海道・東北・北陸と西日本を結んだ西回り航路は経済の大動脈であり、この航路を利用した商船は北前船と呼ばれている。

北前船は、米をはじめとした物資の輸送から発展し、船主自身が寄港地で仕入れた多種多様な商品を、別の寄港地で販売する買い積み方式により利益をあげたことからまさに「動く総合商社」と呼べる。日本海や瀬戸内海沿岸に残る数多くの寄港地・船主集落は、北前船の壮大な世界を今に伝えている。



湊稻荷神社・願懸け高麗犬 この神社には、台座の上の像を回すことのできる「願懸け高麗犬」がある。港が賑わっていた昔、船乗りが遊びに来ることを願う街の女たちは、西風が吹いて船が足止めされるよう高麗犬の頭を西に向けたという。これが「高麗犬をまわして願懸けをする」ことに変化し、今に伝わっている。

新潟市歴史博物館みなとびあ「石庫」旧第四銀行住吉町支店」早川掘や柳並木が復元され、明治から昭和にかけてのみなとまち新潟の景観が再現されている。

旧新潟税関庁舎 西洋建築をまねて新潟の大工が造った建物は、アーチの入り口や、鎧戸を模した下見板の窓、なまこ壁などが印象的。明治の開港五港の税関の建物として唯一現存しているもので、国の重要文化財に指定されている。

句会は、中央公民館のいつもの教室が会場。出席者九名の吟行句を以下に紹介する。

夏柳水路ぐるりと旧税関	斎藤 ヨシ
唐箕にも形いくつか秋の雲	佐藤 幸示
北前の船人留まれ秋月夜	高橋 偏哲
秋天や古る税関の赤瓦	高橋 ひろ
水みくじ大吉いろなき風の中	高野 松風
秋日傘鳥居の前にたたみけり	本間 悦子
新涼の風の沖へとジェット船	山田 季聰
みくじあまた願かけきつね秋の風	渡辺 志ま
くつきりと芝に松影秋暑し	和田 秀男

万象作品の佳句

江見悦子

黙す間の風ゆるやかに秋団扇 東京 高野翠子

親しい友人と会話を楽しんでいる合間にふと沈黙が訪れた。長い夏の間使って少しくたびれた団扇を手にも、ゆるやかな風を送る作者。心の通い合いに、沈黙が少しも気にならない。97歳の作者の、穏やかで満ち足りた時間の充足を思う。

燦燦と川面を跳ぬる秋の声 佐倉 鈴木隆久

季語「秋の声」は秋の季節を実感する音の気配をいう。掲句の「燦燦と」から、まだ夏の勢いが残っている日の光を想像した。光が川面を跳ねるようだと感じ、その気配を秋の声と捉えた作者。繊細な感覚から生まれた、生き生きとした句になった。

秋深し加賀友禪の雨山の絵 金沢 宮崎惠美

雨山は木村雨山。加賀友禪では唯一の人間国宝に認定された染織家・着物作家である。加賀友禪で用いられるのは臙脂色、藍色、黄土色、草色、古代紫の五色、「加賀五彩」と呼ばれる。かつて早春の浅野川で見た友禪流しの鮮やかな色が目に残っている。加賀友禪は絵画調の柄が特徴。作者はどんな色の、またどんな柄の加賀友禪を目にしているのか。綾子先生の句に〈赤多き加賀友禪にしぐれ来る〉がある。

読み返す八雲の日記秋ともし 福岡 園田清子

NHKの朝ドラ「ばけばけ」を見るのは、筆者にとっても毎朝の楽しみの一つ。好奇心旺盛な作者は、小泉八雲の書き残したものを秋の灯の下で読み返している。八雲は金字塔である「怪談」を含め、生涯に23冊の著作を残している。日記として書いたものはないようだが、日本に惚れ込み日本人として家族を愛し、大勢の人々に影響を与えた数々の作品を、作者は「日記」と表現している。

握る掌に術後の温み 明の月 那覇 稲嶺有晃

ご家族か、親しい友人かが大きな手術のために入院した。手術を終えて集中治療室に運ばれ、一夜明けてようやく対面が叶った。思わず握った手の温みに一気に緊張がほどけ、安堵した作者。折から夜明けの月がかかっている。季語「明の月」に思いが籠もる。

川岸に乳張る山羊や秋時雨 茅ヶ崎 久保田昂士子

川岸に連れて来られて草を食んでいる山羊、孕んでいるのか乳房の張りが見て取れる。折からの秋時雨の中である。健気な山羊の姿に、生きる強さと哀れさを感じた作者。眼前の景ではあるが、辛い句になってしまいうので、季語を「草の花」「草の絮」などに変えてみることも。

伴僧の囁れ声や秋彼岸 新潟 柳原キヨ子

伴僧とは「導師に従う従僧」と「広辞苑」にある。法会の際など、高僧に随従する修行中の僧のこと。しかし掲句の「伴僧」はしわがれ声とあるのだから、逆に弟子に従って読

経する年老いた僧侶なのだ。今日の彼岸の法会はお前がやれ
とでも言つて、自分は伴僧にまわつたのか、弟子が朗々と經
を読む傍らからしわがれ声が聞こえる。何とも俳味のある句。

乗り継ぎに小半時ありいわし雲

燕 渡辺志ま

旅の途中、空港での乗り継ぎの時間。いったん待合室に入
ると、窓の向こうの空の鰯雲が爽やかだ。これからの旅に憧
れ、目的地までのフライトの快適さを願う作者。

柿日和庭に幼の三輪車 鹿沼 渡辺利子

柿が赤々と色づく庭に子供用の三輪車が置かれている。

「幼」はお孫さんか。三輪車を置いたまま家に帰つたのか、
どこかに遊びに出掛けたのか、家中がひっそりとしている。
柿日和にふさわしい、幸せな暮しの一齣である。

長き夜の夢は飛んだり走つたり 新座 多田英治

「飛んだり走つたり」に胸を衝かれた。今は自由に動けず、
夢の中でしか「飛んだり走つたり」出来ない。わが身を客観
視し、日々の暮しを俳句に詠む作者にエールを送りたい。

逆上がりくるりコスモス蹴り上げて 松戸 寿多映子

リズムカルな軽やかな句。コスモスの咲く公園で、いとも
たやすくくりりと逆上がりをしている元気な子供の姿を詠ん
だ明るく楽しい句。「リ音」が3回、「上がり」「くるり」の
連続等、言葉の面白さが際立つ。

慰霊船 南へ船出盆の月 東京 大場八朗

先の大戦で南の海に散つた兵士の霊魂を鎮めようと、今年
も慰霊船が出航する。ちょうど盆の月が美しい夜。90代の作

者の年齢を思うと、戦争が身近だった子供時代があり、疎か
には読むことが出来ない。省略の決まった佳句。

木道の何処かがたつく草紅葉 川崎 横山ユキ子

湿原の木道を歩いていると靴裏に違和感を覚えた。古くな
つて木道のどこかがたついているのだろう。実感のある句。
草紅葉が可憐である。

罅 深き仁王の踵 初嵐 静岡 永田公香

山門の仁王像の踵の罅に目を留めた作者。吹きさらしの風
の中で何百年も立ちはだかつている仁王に寄せる同情と共感。
「初嵐」が生きている。

病院のベッドの堅き子規忌かな 静岡 長谷川洋子

入院時の実感を詠んだ。堅いベッドの上で、蒲団に横臥し
ていた子規の苦痛を思う。「子規忌」は9月19日。

満洲の写真の母や鷹渡る 那覇 高嶺容道

亡くなられたお母様の満洲時代の写真が残っている。勝手
な想像を許して頂ければ、満洲の平原や広大な畑を背景にし
た写真ではないか。鷹の類の差羽が北方からやって来る「鷹
渡る」に、はるか満洲と日本を隔てた距離を思う。お母様へ
の鎮魂と祈りの句。

きりぎりす掩体壕の驕の中 富野 宜野 顕

「掩体壕」とは、空襲から軍用機を守るために軍用飛行場
に作られた格納庫のこと。残っていた掩体壕の驕できりぎり
すが鳴くのを聞いた作者。激しい戦いのあとに生き残った小
さな虫。時間を遡ってイメージが広がっていく。

万象基金のご報告

匿名 五口

店網 洋子様(栃木) 四・五口

成瀬真紀子様(富山) 五口

(令和7年10月1日〜11月30日・受付)
「万象」の発展のため、大切に使用させて頂きます。

万象俳句会

〈お詫びと訂正〉

12月号に誤りがありました。お詫びして訂正致します。

P9下段最終行の句

〈誤〉夕景の句も重ねあふ秋扇

〈正〉夕景の雲重ねあふ秋扇

P27上段の鶴田勝子様の句

〈誤〉朝採りの茶にすがり来しはつたの子

〈正〉朝採りの菜にすがり来しはつたの子

座談会 最近の名句集を探る

吉田 律「二点」

森尾ようこ「惑星」

北大路翼「給食のをばさん」

司会 筑紫磐井
大西 朋
小川 楓子
抜井 諒一

俳句四季新人賞・
奨励賞受賞者のいま

新作10句競詠

俳句四季大賞受賞記念
作品40句 中村和弘

☆巻頭三句

正木ゆづ子／高野ムツオ

片山由美子／星野高士

井上泰至／佐藤文香

☆今月の華

大塚 凱＋辻美奈子

☆俳句と短歌の10作競詠

及川真梨子＋平井 俊

☆「HINO」私の源流

山田弘子＋藤井啓子

新連載

俳壇ランドスケープ

浅川芳直

☆好評連載

成瀬政博

とりあえずの日々

青木亮人

句の手触り、俳人の響き

大西 朋

俳句へのまなざし

井上泰至

俳句の詩語

イメージ辞典

橋本喜夫

俳句のレトリック

藤村公洋

俳句のつまみ

神作研一

てのひらの江戸

古奥籍を旅する

堀田季何

諸家書架

石井隆司

たもとほる

俳句よもやま話

二ノ宮一雄

俳句四季
Haiku Shiki

2026年1月号

12月20日発売
定価1100円(税込)
https://www.tokyoshiki.co.jp/ 東京四季出版
〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

ルビーの小函 (1月号)

「同人作品」「万象作品」に掲載された漢字表記でルビを振らなかったもののうちから、読みにてこずりそうなものを拾ってあります。作品鑑賞の参考にしてください。太字は季語ですから歳時記で確かめてください。読みは現代仮名遣いにしてあります。

(編集部・校正担当)

- | | |
|--------------------------|-----------------------|
| 8 添水 (そうず) | 21 砂嘴 (さし) |
| 海豚 (いるか) | 斗南 (となみ) *青森県下北半島の地名 |
| 門 (かんぬき) | 22 濁声 (だみごえ) |
| 水照り (みでり) | 23 折立 (おりたて) *新潟県の温泉地 |
| 9 繡の実 (もちのみ) | 25 夕星 (ゆうずつ) |
| 和毛 (にこげ) | 末生り (うらなり) |
| 10 昨夜 (よべ) | 26 海桐の実 (とべらのみ) |
| 13 身に入む (みにしむ) | 27 虚栗 (みなしぐり) |
| 常滑 (とこなめ) *愛知県の地名、焼き物の産地 | 郁子 (むべ) |
| 上に (へに) | 東雲 (しののめ) |
| 14 秋湿 (あきじめり) | 28 漁舟 (いさりぶね) |
| 棟の実 (おうちのみ) | 29 熟寝 (うまい) |
| 15 凹 (くぼ) | 31 猿 (ましら) |
| 櫓 (やぐら) | 41 菊脰 (きくなます) |
| 櫟の実 (くぬぎのみ) | 帯 (へた) |
| 16 杜氏 (とうじ) | 43 罔籠 (おとりかご) |
| 戦ぐ (そよく) | 55 黙す (もだす) |
| 碓石 (かわらいし) | 秋没日 (あきいりひ) |
| 17 池畔 (ちはん) | 56 枸橘の実 (きこくのみ) |
| 灸花 (やいとばな) | 鯀 (かじか) |
| 馬柵 (ませ) | 帚木 (ははきぎ) |
| 破れ御幣 (やれごへい) | 歌舞く (かぶく) |
| 殿 (しんがり) | 57 稽田 (ひつじだ) |
| 18 衣被 (きぬかつぎ) | 59 潦 (にわたずみ) |
| 櫟る (くすぐる) | 虫集く (むしすだく) |
| 19 通草 (あけび) | 60 強面 (こわもて) |
| 枸橘 (からたち) | 61 銅色 (あかがねいろ) |
| 木豇豆 (きささげ) | 62 階 (きざはし) |
| 20 芋莖 (ずいき) | 箕 (み) |
| 喉 (のんど) | 63 塙 (ねぐら) |

北 南 西 東

消 息 等

江見悦子主宰の句「初蝶」11月号に

家刀自の古裂のてちやう窓若葉 悦子

「鶴」11月号「現代俳句を読む」に榎本文

代さんの句を佐戸律子氏が鑑賞

青鷺の一步進みて日暮れけり

「万象」8月号 近辺の水田や、川岸で

よく見かける青鷺コウノトリ目サギ科に属

する。微動だにせず佇む姿は絵になり、写

真ともなり得る景観。買物に出かけ帰宅す

るも、方向さえ変わらず佇んでいる。飛ぶ

ときは首をS字に縮めている。首を伸ばし、

じつと待つ優雅な姿に似ぬ悪食で、魚・カ

エル・ザリガニとんでもござれと漁るら

しい。夕方鳴く声を残し樹の天辺に止まっ

ている数羽を見ることがある。「一步進み

て」の青鷺の習性を細やかに察知し、「日

暮れけり」の時空感絶妙である。

令和7年・第42回 信州さらしな・おぼす

て観月祭 全国俳句大会

一般応募句数15000句、「万象」から

24人96句の応募がありました。江見悦子主

宰を含む各選者（11人）による結果を紹

介します。

江見悦子選 秀逸

忘れもの晩夏海へ取りに行く

杉澤 修

玉井玲子選 秀逸

今日のことに涼しき風のこと

前田貴美子

金子親石選 秀逸

秋蟬や頬に傷ある石仏

杉澤 修

佳 作（17句）入選者名

伊藤美音子・今越みち子・売野緑・大久保

進・神田美穂子・北川禮子・下嶽孝一・竹

澤竹里・高野松風・豊田高子・藤田裕子

俳人協会静岡県支部俳句大会

事前投句

石川晶子 秀逸・渥美絹代選

青柿や無口でありし少年期 杉澤 修

磯田なつえ・中川正男選 杉澤 修

触れ合はぬ距離に吹かれて蒲は穂に 杉澤 修

大石そうご選

風薫る薩摩訛りの研修医 杉澤 修

加藤やえ子選

黒髪をボニーテールに日焼の子 神田美穂子

吹井紫乃選

靴の紐結び直せば初音かな 神田美穂子

増田恵津子 秀逸・渡井一峰選

万緑や天守に見還る四方の山 神田美穂子

当日句

渡井一峰 特選・村上尚子 特選

丸めたる反古のつぶやく良夜かな 神田美穂子

令和7年度佐倉市民文化祭秋季俳句大会

10月25日（土）ミレニアムセンター 佐倉

にて開催。「万象」関係の入選者は左記の

通り。尚、本大会はその準備から当日の実

施運営に至るまで、「うすめ句会」のメン

バーが中心になって執り行われました。

（三屋英俊・記）

市長 賞

新薬の青き香りを束ねたり 新谷八郎

佳作

腑分け器具見る秋冷の畳部屋 大内佐奈枝

そぞろ寒畳の縁につまづきぬ 片桐帆一

金木犀駄菓子屋の跡まだ更地 鈴木隆久

着崩れを直され今日も菊人形 鈴木美穂子

苞に土自然薯かかへ友来る 有泉正夫

葛西茂美 特選

石垣の反りを映すや水の秋 横川良子

横川良子 特選

新薬の青き香りを束ねたり 新谷八郎

第26回「俳句四季」全国大会 作品大募集

投句料 1組2句につき千円

投句締切 令和8年2月2日

（報・編集部）

939-0364

射水市南太閤山13
|
24

万象作品投句係行

110
円切手を
貼ってください

氏 名	住 所

〈通信欄〉

編集後記

▽福岡県の宗像大社での初詣を思い出しています。本殿脇の坂道を登った高台に、古代の祭祀の跡がありました。笹竹に注連縄を張り巡らしたただけの結界。そこに手を合わせた時に感じた清浄感こそが、淑気というものでした。よい一年になりますように。(千久)

▽俳句における新年詠とは、新しい年を寿ぐ句を詠むこと。新年を寿ぐという一点のみを念頭において後は発想を自由にすれば画一性や類想とは無縁の句が出来るはずだが、それが中々難しい。「発想を自由に」これを今年の目標に俳句が楽しめたらと思う。

(美穂子)

▽明けましておめでとうございます。「表紙裏」と「私のこの一句」を担当しております。一年で「表紙裏」は12人。「私のこの一句」は48人。それぞれ味わい深い原稿をお寄せ頂き感謝に堪えません。又、毎回、心に残る思いを頂き、ありがとうございます。

(宏子)

▽本誌10月号「続・風のしをり」の「子規と私(九)」で綾子師が述べている。子規の俳句のなかで一番好きなのは(鶏頭の十四五本もありぬべし)だと。私も……という恐れ多いが、子規の句といえはいつもこの句が思われる。病床の子規が庭を見やつの作だろうが、写生に裏打ちされた詩情、言葉の流れに魅せられる。下五は「あるらしき」でも「ありにけり」でもなく「ありぬべし」と感動がきつぱり言い放たれる。ああ、こんな風に句がつくれたら。

(明子)

▽女性初のエベレスト登頂に成功した登山家・田部井淳子の生涯を描いた吉永小百合主演映画「てっぺんの向こうにあなたがいる」が好評である。原案は淳子さんの「人生、山あり、時々谷あり」で、世界の山を登りながら家族との苦勞・触れ合いを描く。長男進也氏が取材に対して「母・淳子が教えてくれた人生という山登り」と語る。俳句にも「人生、山登り」が通じよう。

(孝一)

会員を募ります

会員は左記の会費(誌代)を前納していただきます。

一年分 一二、〇〇〇円

会費の納入は左記の振替をご利用ください。新会員は必ずその旨明記。

郵便振替口座 00230・0・103581

万象俳句会

住所変更届・退会届等については、必ず封書又は葉書にて、左記へご連絡いたします。

〒284-0015 四街道市千代田1-7-10 塗木翠雲

万象 一月号

第二十四巻 第十号

通巻 第二八六号

令和八年二月一日 発行

主宰 江見悦子

発行人 江見悦子

編集人 中村千久

〒168-0072

東京都杉並区高井戸東一-31-6 603

万象発行所

☎〇三六三三四一五七九六

万象

第二十四卷

第十号

(通卷二八六号)

平成十四年十一月十三日
令和八年一月一日発行

第三種郵便物認可
(毎月一回一日発行)